

研究紀要 8

目 次

金生遺跡出土の土器 1 (後期)	新津 健	1
両の木神社遺跡出土の須恵器長頸瓶について	出月 洋文	18
山梨県甲府市相川河床から発見された		
ナウマンゾウ白歯化石について	間島 信男	32
	河西 学	
	保坂 康夫	
明野村中村道祖神遺跡出土炭化物について		
	松谷 晓子	48
	長沢 宏昌	

1992

山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

序

このたび、当博物館・埋蔵文化財センター職員の日ごろの研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第8号を公刊するはこびとなりました。

今回は、四篇の論考を収載いたしましたが、うち二篇は寄稿であります。まず、新津健「金生遺跡出土の土器 1(後期)」は、1980年に調査した、大泉村の金生遺跡において出土した遺構外遺物を、縄文時代後期に限定して報告したものであります。これらは、紙面の都合上報告書に載せられなかったもので、遺構に伴わない各グリッド出土の土器を1989年刊行の報告書に基づいて、分類・検討をし縄文時代後期土器形式の問題を提起しております。出月洋文「両の木神社遺跡出土の須恵器長頭瓶について」は、考古博物館の企画展をとおして、1987年度の発掘調査で得られた長頭瓶の観察と、その年代やこの遺跡の在り方などを再検討しております。そして、長頭瓶という器種が破碎されていたことから、古墳等の墓以外での祭祀行為の存在を推定し、県内における須恵器研究の在り方に、新視角を開いております。

以上二篇、各位の忌憚のないご批判・ご叱正をいただければ幸甚であります。

寄稿論文では、「山梨県甲府市相川河床から発見されたナウマンゾウ臼歯化石について」という論題で、埼玉県立古代高等学校の間島氏・帝京大学山梨文化財研究所の河西氏よりいただきました。その内容は、本県で2例目の発見となるナウマンゾウの臼歯化石について、間島氏が化石標本の記載を中心に執筆し、河西氏が地質調査の結果を加えて検討したものであります。この発見によって、ナウマンゾウ化石の多産地間の空白地であった本県に、貴重な資料が追加されました。なお、本資料出土の経過については、当センターの保坂康夫が執筆担当いたしました。二篇目は、東京大学総合研究資料館の松谷氏からいただきました。論題は、「明野村中村道祖神遺跡出土炭化物について」であります。今回報告する資料は、中世の地下式坑から出土した炭化穀子塊について観察したものであります。その結果、アワと同定された資料としては、本県においてこれが初めてであり、中世の人々の食生活の一端に触れることができました。

末尾ながら、貴重な調査結果をお寄せいただいた諸先生方に改めて厚く御礼申し上げます。

1992年3月

山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

磯貝 正義

金生遺跡出土の土器 1 (後期)

新津 健

1はじめに

2出土土器

3まとめと課題

1はじめに

金生遺跡は山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字金生に位置しており、1980年（昭和55年）の発掘調査により縄文後・晩期を中心とした配石遺構を伴う集落址であることが判明している。これらの成果については1989年刊行の報告書に詳しい¹⁾（以下報告書と記載する）。しかし報告書でも述べておいたように、ここからの出土品は膨大な量であり紙面の都合からこれらを網羅することは殆ど不可能であった。特に土器については、遺構から出土したものについては破片資料も含めすでに報告したが、遺構に伴わないグリッド出土の破片は大部分を割愛してしまった。そこでこの紙面を借り、未報告の各グリッド出土の土器について一部ではあるが報告し若干の検討を加えることとした。なお今回は後期の土器に限ったが、引き続き晩期についても報告していきたいと考えている。

2出土土器

金生遺跡からは住居址41軒・配石遺構5基・石組遺構15基・土壙8基などの遺構が発見され、これらの遺構内や包含層中から各時期にわたる多くの土器が出土している。報告書ではこれらの土器について以下のように分類し説明や検討を行なった。今回も基本的にはこの分類に従って報告していくが、後期に限ったことから第3群～第5群及び第9群が対象となる。

第1群土器	前期の土器	3類 加曾利B2～3式土器
第2群土器	中期の土器	第5群土器 後期後葉の土器
第3群土器	後期前葉の土器	1類 羽状沈線の土器
	1類 称名寺式土器	2類 弧状沈線の土器
	2類 堀之内式土器	3類 縄文の施された土器
第4群土器	後期中葉の土器	4類 安行系土器
	1類 加曾利B1式土器	5類 東北系土器
	2類 加曾利B2式土器	6類 東海・近畿系土器
	7類 沈線を持つ波状口縁深鉢形土器	9類 条旋文土器

8類	磨消縄文のつけられた壺形土器	10類	その他
9類	有刻縁帶の土器	第7群上器	晩期後半の上器
第6群土器	晩期前半の上器	1類	大洞C2式系土器
1類	清水天王山式上器	2類	浮線網状文系土器
2類	安行3a・大洞B式系土器	3類	東海・西日本系土器
3類	大洞BC式系土器	4類	条痕文上器
4類	大洞C1式系土器	5類	無文上器
5類	安行3b・3c式系土器	第8群土器	台付土器
6類	「鍵の手」文土器(佐野I式系)	第9群上器	縦線文土器
7類	北陸系土器	第10群土器	無文土器
8類	東海系土器		

第3群土器 (第1図1~3)

1類

いずれも深鉢形土器の口縁部破片で、1はJ字形の磨消縄文がみられるやや古いタイプの土器。2・3は沈線と列点の土器。

2類 (第1図4~14、第2図、第3図)

①第3図に示したような頸部がやくびれる壺形の深鉢形土器が多い(第1図4~11)が、これらはII縁部や側部に沈線あるいは円形の刺突文が施されるものである。なお口縁の形態には突起状をなすもの(第3図・第1図5、特に第3図は4単位の突起をなしている)、緩やかな波状をなすもの(第1図4・6~9)、ほぼ平坦なもの(第1図11)、の3種類がみられる。

②壺形は①に類似するが磨消し縄文で飾られる土器。第2図3~5。この種の土器の口縁部は①にくらべより強く開き、器形も低めのものが多い。

③地縄文に沈線の付けられた単純な器形の深鉢形土器。第2図1・2がある。

④磨消縄文のつけられた朝顔形の深鉢形土器(第2図7~14)。平口縁が多いが、緩やかな波状口縁の土器もみられる。

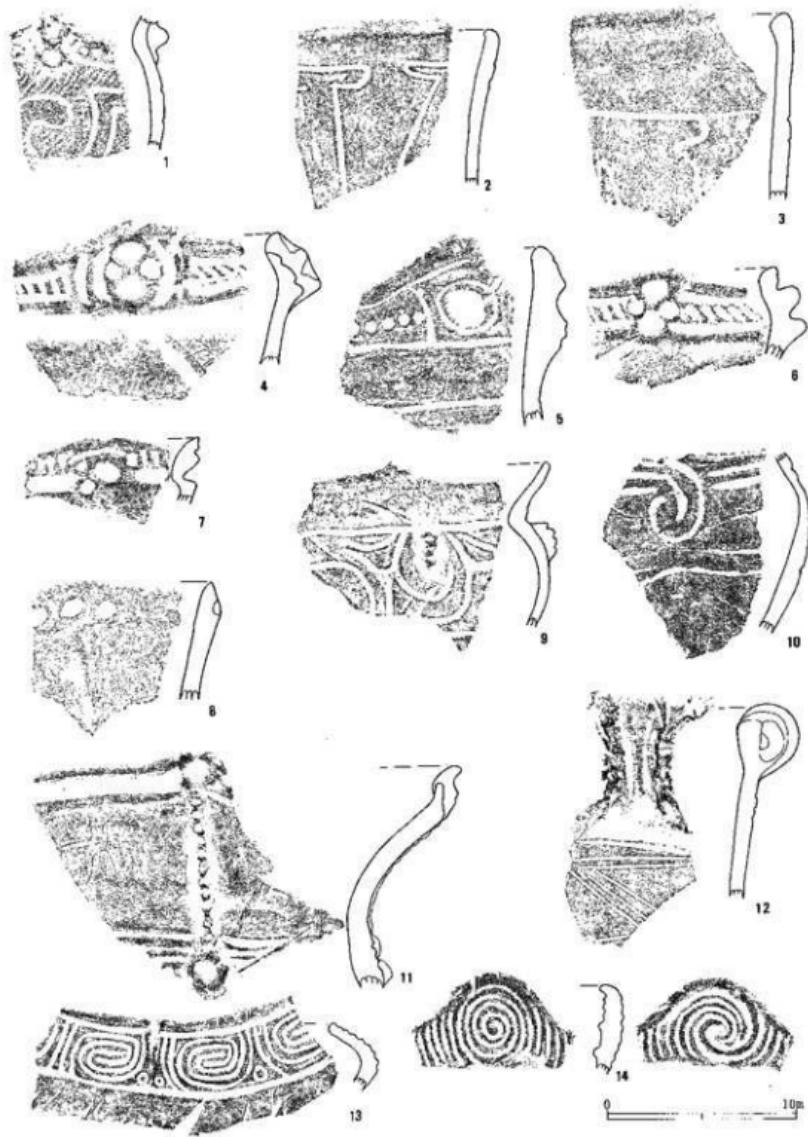
⑤他に渦巻き状の沈線の第1図13や14の土器、横状の円形把手の付けられた深鉢形土器(第1図12)もみられる。13は浅鉢形土器であろうか。

以上これらは堀之内1式と2式を含むが、特に①③⑤は1式、④は2式に分類できよう。②については問題も残るがここでは1式に含めておく。

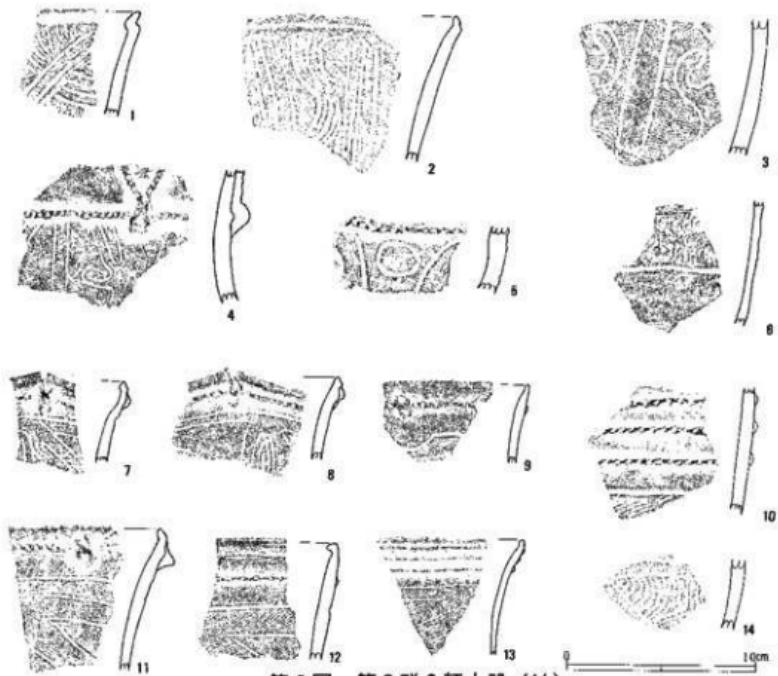
第4群土器 (第4図、第5図)

深鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器などがある。それぞれいくつかの特徴があるが特に深鉢形土器はヴァラエティに富んでいる。時期的な差も認められることから、以下特徴を整理しながら説明を加える。

①深鉢A 平II縁で平行する磨消し縄文帯あるいは沈線の施文される土器。内面にも4~5条の



第1図 第3群1類・2類土器 ($\frac{1}{2}$)



第2図 第3群2類土器(1/2)

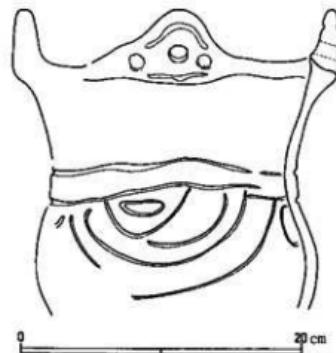
平行沈線が走る。底部から口縁部に向かい斜直ないし緩く湾曲して立ち上がる単純な器形。第4図3・5。

②深鉢B 波状口縁で頂部に突起が付けられる。外面磨消し繩文帯、内面には刻みの連続する降線2条と沈線がみられる。第4図1。

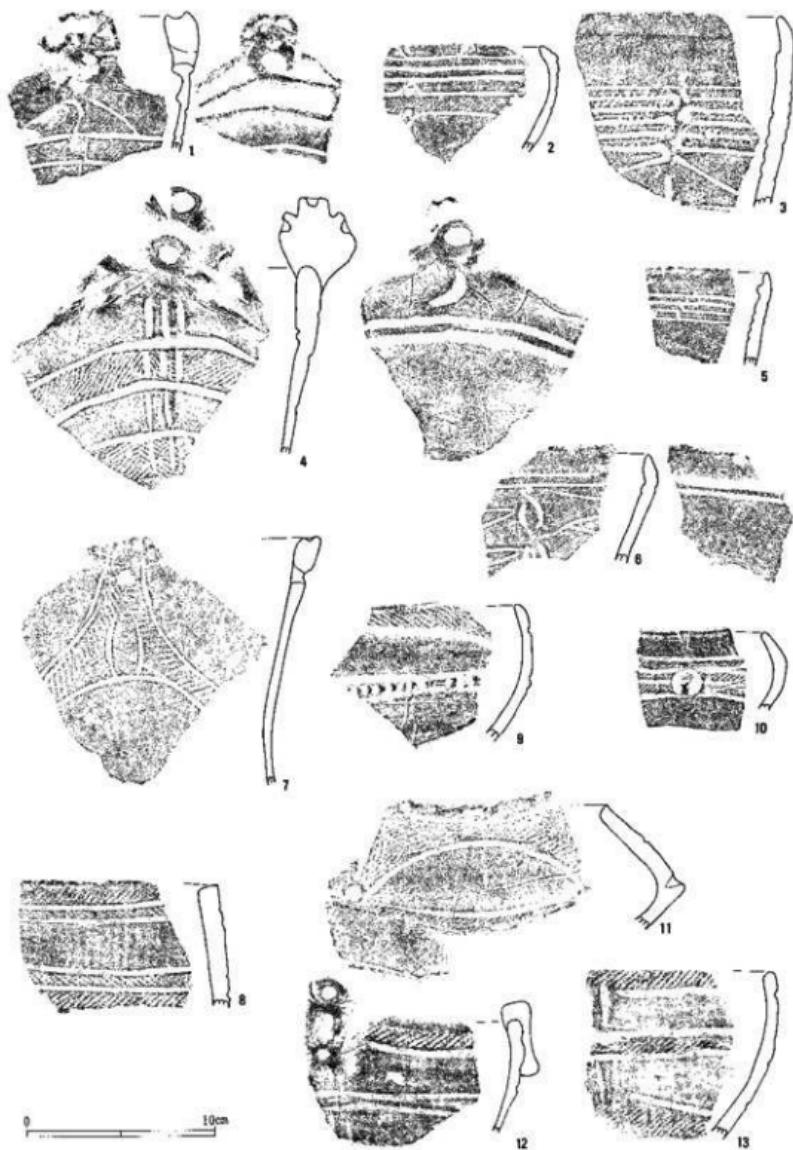
③深鉢C 深鉢Bと同様の器形であるが、磨消し繩文帯が広くなり、文模帶には「川」の字状の短線が縦に連続する。内面は沈線のみ。第4図4。

④深鉢D 深鉢Aに似た平口縁の深鉢形土器であるが磨消し繩文帯は広くなり、同時に平行沈線から幾何学的な沈線で区画されるようになる。また二つの弧が向き合った「対弧文」が縦に並ぶ。内面沈線。第4図6。

⑤深鉢E 波状口縁で波頂部には小突起がつく。ここから曲線的な沈線により区画された磨消し繩文帯があり、さらにこの中に対弧文が施される。波頂部直下に孔が貫通。頸部がゆるく括れる器形。第4図7。



第3図 第3群2類土器(1/4)



第4図 第4群1類～3類土器（%）

⑥深鉢 F 口縁部が「く」の字形になる器形と思われるもので、平行する磨消し縄文帯の施された土器。第4図8。

⑦深鉢 G 平口縁で格子状の沈線で飾られる土器。第5図5。

⑧深鉢 H 平口縁で口唇部に押圧文が連続し、以下斜交沈線や羽状沈線の施される土器。第5図11～13。11・13の口縁部内面には沈線が走る。広く開いた口縁で、頸部の括れの強い器形の深鉢形土器であろう。

⑨深鉢 I 器形は深鉢 H に類似したものであるが、口唇部の押圧文は無く、体部に羽状沈線の施される土器。第5図15・16。羽状沈線は深鉢 H にくらべ短く疎らな感じ。特に15は著しい。

⑩深鉢 J 波状口縁で斜行沈線や羽状沈線の土器。第5図6～9。波状の状態にはヴァラエティがみられ、波頂の高いもの(6)、中位のもの(8)、緩やかなもの(9)等がある。この口縁部の立ち上がりかたについても6は内渦気味、9は斜直、7・8は中間タイプである。また7では口唇に押圧文が連続している。

⑪深鉢 K 深鉢 J と類似するが口縁直下に連続刻目文が走り、円形の張り付けがみられるもの。第5図10。

⑫深鉢 L 深鉢 J と同様の羽状沈線の施された波状口縁深鉢形土器であるが、口縁に縄文帯が走るもの。第5図14。羽状沈線の状況は深鉢 I に類似。口唇断面形状は肥厚している。

①浅鉢 A 桶形の器形で体部上半に平行沈線で区画された磨消し縄文帯が付く。沈線が上下に突出した箇所に円文が2個みられる。第4図2。

②浅鉢 B 浅鉢 A に類似するが円文のかわりに対弧文に近い形状の「の」の字に似た施文がみられる。第4図10。

③浅鉢 C 口縁部に曲線的な縄文帯がみられ、最大径部分には押圧文が横走する。第4図9。

④浅鉢 D 「く」の字形に屈折する、いわゆる「算盤玉形」浅鉢の一類である。連続する弧状沈線で区画された磨消し縄文帯で飾られる。第4図11。

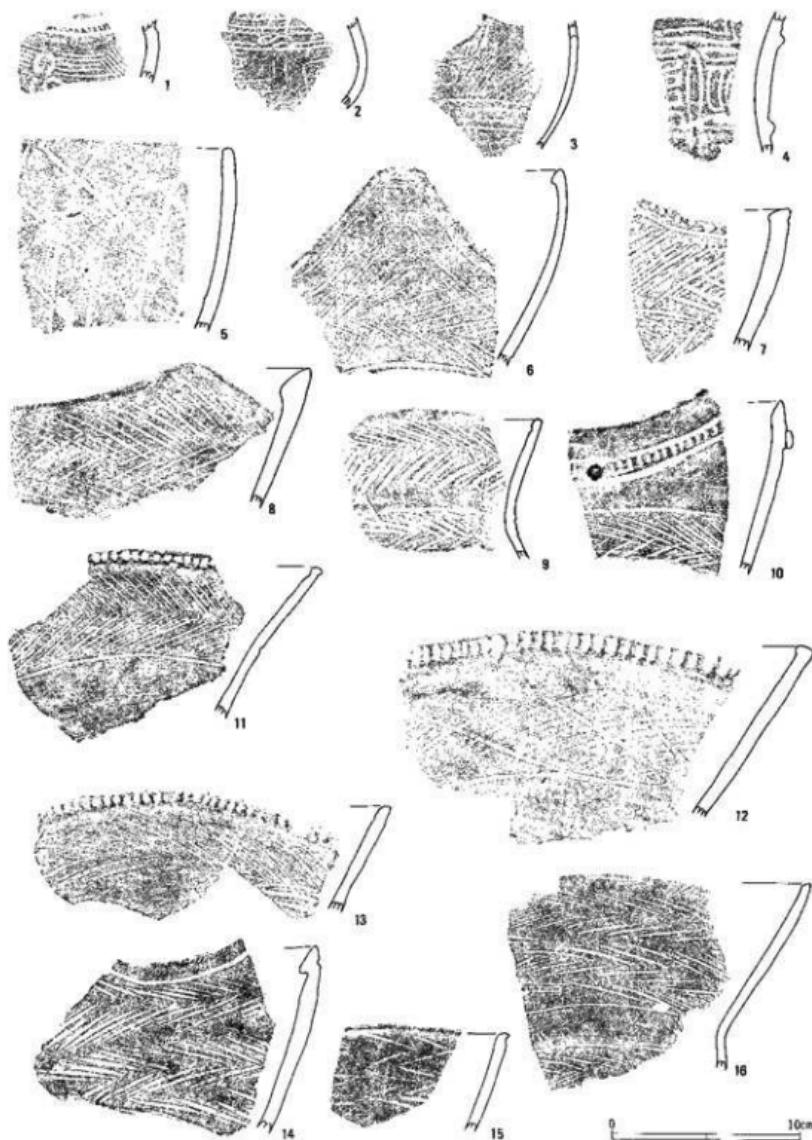
⑤浅鉢 E やや深めの鉢形を呈するものと思われるものの。第4図12・13がある。12には突起がある。口縁部にはいずれも縄文が施され、13では更に体部にも沈線で区画された縄文帯が走る。この縄文帯を結ぶかのように2ないし3単位の縦短線がみられる。12にもこれに類した短線が認められる。

①注口 A 第5図1～3はいずれも球形を呈する注口土器の胴部破片。これらは類似した器形・文様の土器である。

②注口 B 第5図4は口縁部破片。茨城県福田貝塚等に類例のある器種であろう。

以上について、報告書で行なった時期類別にあてはめると次のようになる。

まず深鉢 A・B、浅鉢 A・B、注口 A・Bについては1類とした加曾利B1式の範疇にはいるものである。深鉢 D・E・G、浅鉢 C・D等は2類とした加曾利B2式ととらえられよう。また深鉢 C



第5図 第4群1類～3類土器 (1/2)

や浅鉢Eについては文様帶の範囲が広くなり2~3本単位の短線が加えられること、器形について深鉢Cは口縁の開きが強いこと等から2類に入れておきたい。次ぎに深鉢F、H、I、J、K、Lについては問題の多い土器であるが、3類とした加曾利B2式新段階からB3式に位置付けられるものであろう。特に深鉢Fは報告書の検討の項では加曾利B3式としたものである。また羽状沈線史上器群の内の深鉢Iや深鉢Lについてはより後出の可能性も考えておきたい。

第5群土器（第6図～第8図）

後期後葉とみられる上器を本群としたが、報告書では文様の特徴や地域性から大きく9類でとらえた。このうち今回の報告では1~7類が該当する。

1類 羽状沈線の上器（第6図1.3~9） これらは更に施文から3種に分類した。

(a) 繩文の施されたもので、1・3~7がある。これらは平行線の深鉢形上器で、II縁部は概ね「く」の字形に屈折する(1、7)が、4のように屈折の弱いものも含まれる。II縁部は平行する沈線とその間の繩文帶とから構成される。これらが1や4に見るように全て平行に全周するのか、5・7のように対弧状に収束するのかは小破片のため定かではない。また7では屈折部の、文様がとぎれる箇所に円形ないし楕円形のコブ状突起が付けられている。頸部から体部には羽状沈線が何段もつけられるのが普通であるが、この沈線は4群のそれにくらべ間隔が広い。

(b) 器形や文様構成は(a)に類似するが、繩文が施されないもの。今回の資料にはない。

(c) 繩文はなく、口縁部文様帶に刻目や三日月状の貼り付け文のみられるもの。8があるが、9もこの種であろうか。8は深鉢形上器で「く」字状の器形ではないが、口縁部文様帶には末端がやや弧状になる平行沈線と、背中合わせになった三日月状貼付文がみられる。

2類 II縁部文様帶に弧状沈線や沈線のつけられた土器（第6図10~17）。これらは深鉢形土器である。沈線の状況から3種に分類した。

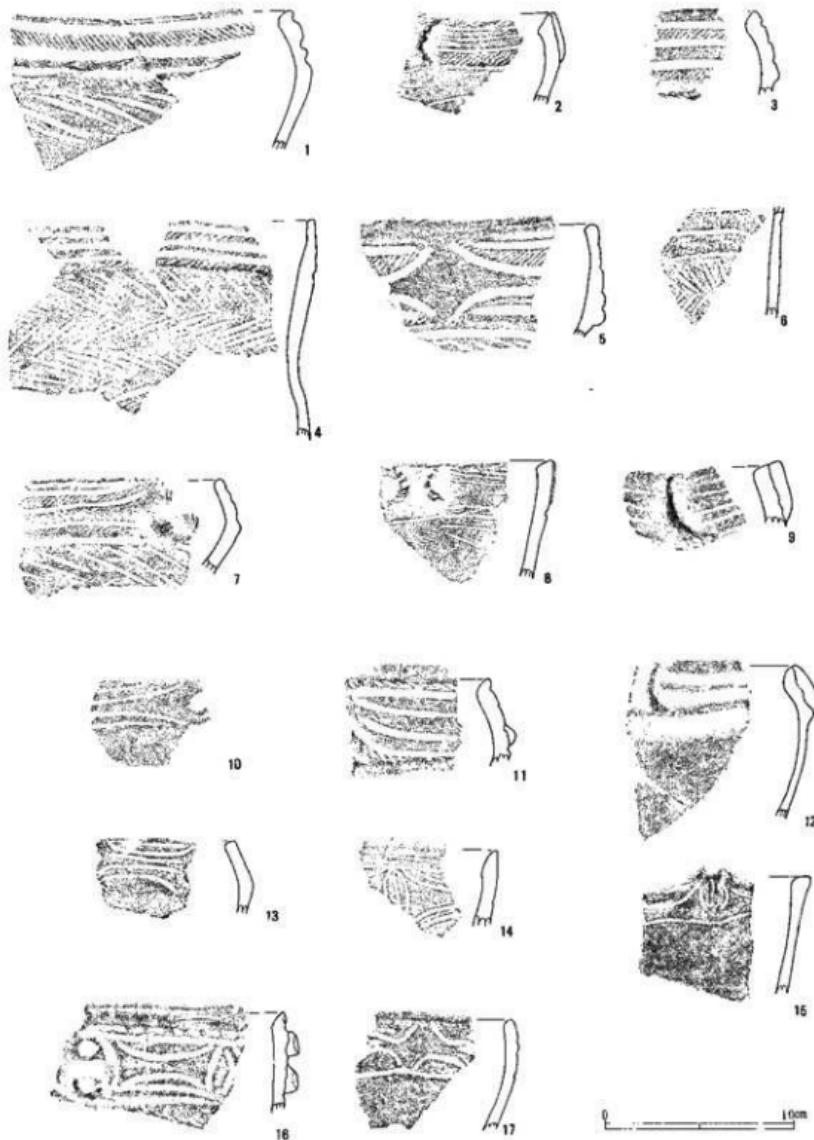
(a) 浅い沈線が横走るもの。ここでは12があるが、この沈線は浅い凹線状であり6類b種の可能性もある。また三日月状貼付文があることから1類c種とした9と共通するものかもしれない。11もこの種としておくが、同様に1類c種の可能性もある。

(b) 平行沈線の末端が曲りやや弧状をなす(10)。ゆるく「く」字形に屈折する口縁部の深鉢形土器。円形の窪みを中心とする曲がった沈線が対象に走っている。

(c) 弧状沈線の上器。(b)種の末端の曲がった沈線が短くなり、背中合わせの弧状沈線が対象的に施され(13・17)、更にその間に向き合った弧状沈線が付けられるもの(14・15)、円形の貼付文がみられるもの(16)等がある。器形にはゆるい「く」字形口縁(13)、ゆるく湾曲(17)、直線的(14~16)などがあり、特に15は肥厚したII縁断面である。

3類 繩文の施される土器（第6図2・第7図1）

2は内湾する口縁の深鉢形土器。II縁部と平行に磨消し繩文帶がみられ、三日月状に突起が貼付けられている。第7図1は胸部破片であるが弧状に区画された中に繩文が充填されている。



第6図 第5群1類・2類土器(%)

4類 安行系の土器群（第7図2～14）

- (a) 平行する隆起帯縄文の土器。平口縁の深鉢形土器(3・4)、波状口縁深鉢形土器(2・7)等あるが、5・6は鉢形の可能性もある。8は隆起帯が非常に高い。
- (b) 隆起帯縄文にブタ鼻状の瘤が貼り付けられ、縄文帶も複雑になる土器。平口縁(9)、ゆるやかな波状口縁(10)、著しい波状口縁(11)等の深鉢形土器がある。
- (c) 刻印のつく隆起とブタ鼻状の瘤がつく深鉢形土器。12～14があるが、いずれも波状口縁で、特に12・13では波頂部に突起がみられる。

以上について(a)は安行1式、(b)(c)は安行2式土器であろう。

5類 東北系の上器（第7図15～21、第8図1～7）

いわゆる「コブ」付上器と称される一群の土器。深鉢、浅鉢、壺などの器種があり、数種類のコブや刻目が認められる。

(イ) 深鉢形土器

- ①弧状沈線区画内の刺突文と、文様連結部のコブを特徴とする。コブは人きく、ブタ鼻状ないし円形をなす（第7図17～19）。
- ②刺突文ないし刻目文と、刻みのついた縦長コブでかざられるもの。第7図20、第8図6がある。
- ③刺突文と2個一対の梢円コブ。第8図2。
- ④コブは不明ながら刺突文ないし刻目文の土器。第8図1・3・5。特に1の刻目文帶は入り組み状をなしている。
- ⑤入り組み縄文帶と2個一対梢円コブ。第8図4。
- ⑥コブは見られないが⑤と同様の入り組み縄文のほどこされるもの。第8図7。

(ロ) 浅鉢形土器（第7図21）

刻目文と刻みのついた縦長コブのみられる土器。深鉢形土器②の第7図20と同様の構成。

(ハ) 壺形土器（第7図15・16）

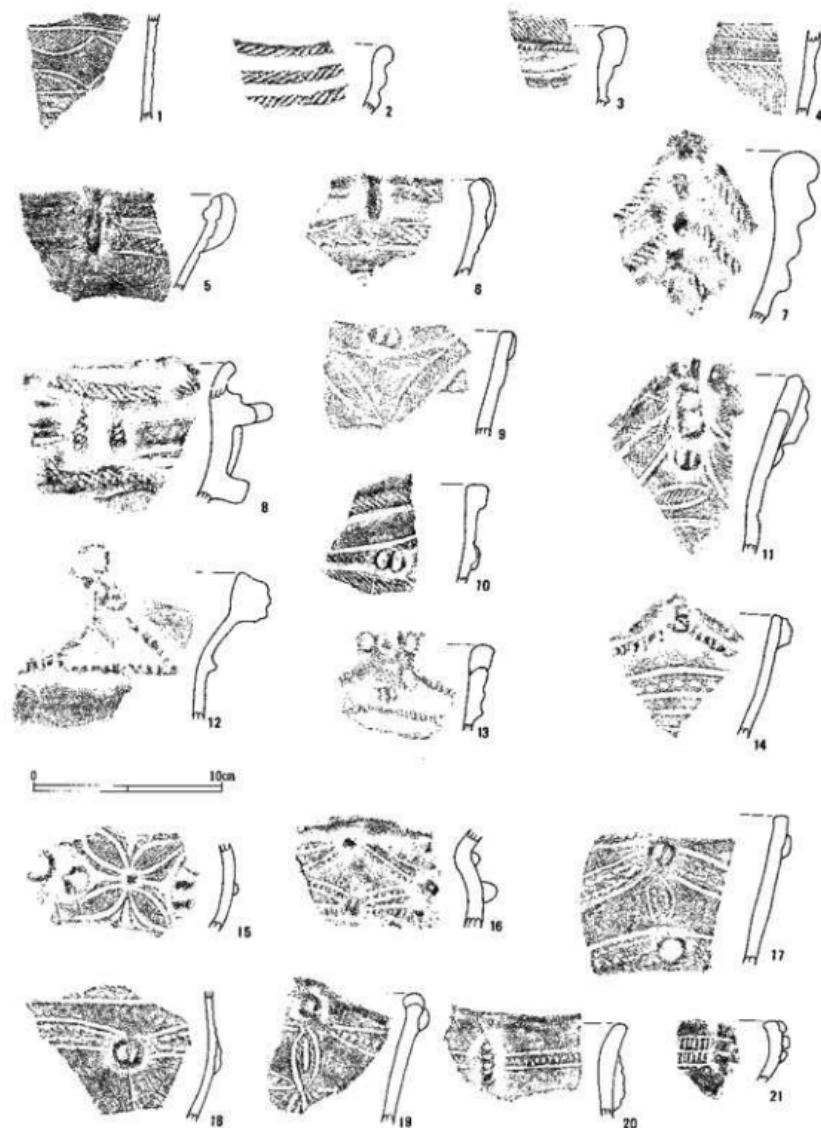
いずれも小型の壺とみられる器種で、円形コブが文様の連接部につけられている。15は木の葉状の弧線連結文、16は刺突文のつけられた弧線文の一種。

コブ付上器については三日月コブなどが古く、掘り起しコブや刻目などが新しい段階のものとされているが、ここではそれぞれの時期差を明確にすることはできない。なお深鉢①にみられるブタ鼻状のコブについては安行2式につながるものと思われ、刺突文や刻印の種類はやはり後期終末とすることができるよう。

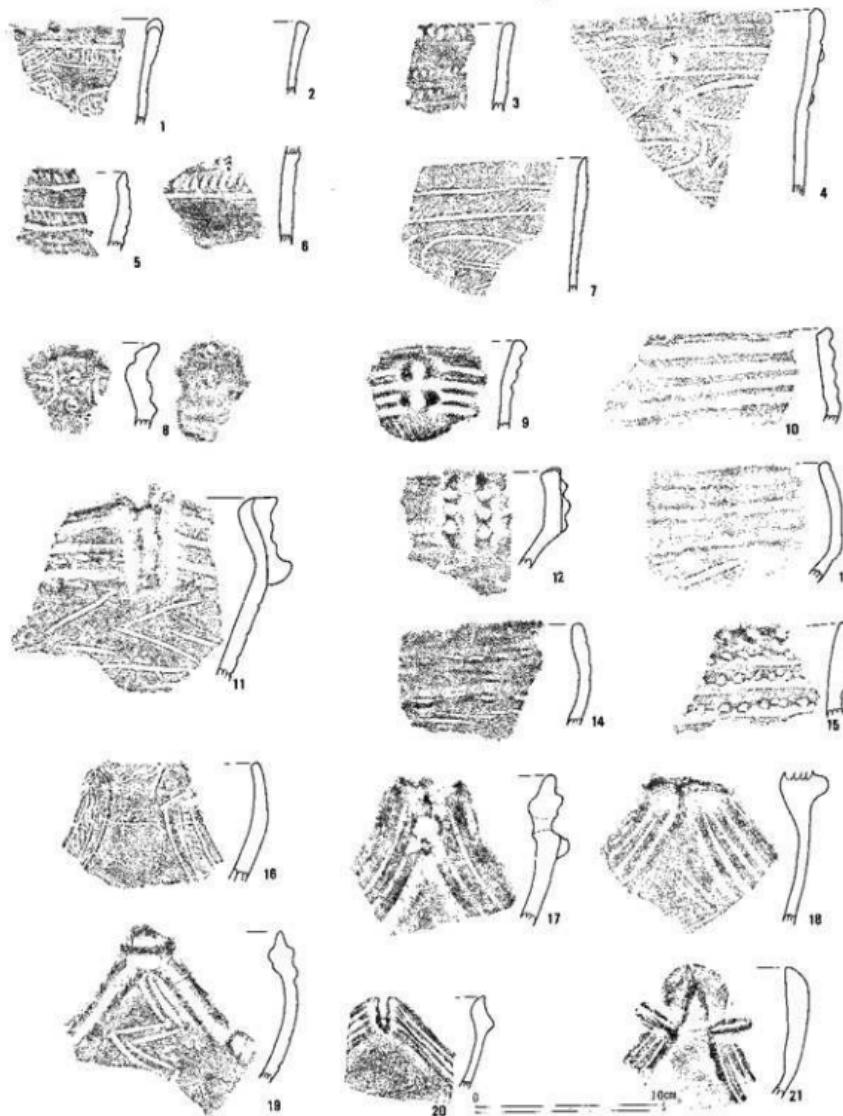
6類 東海西部・近畿方面系の土器（第8図8～15）

図示したものは全て深鉢形土器で、凹線文土器の系列に入るものが主体であるが幾つかの特徴がみられる。

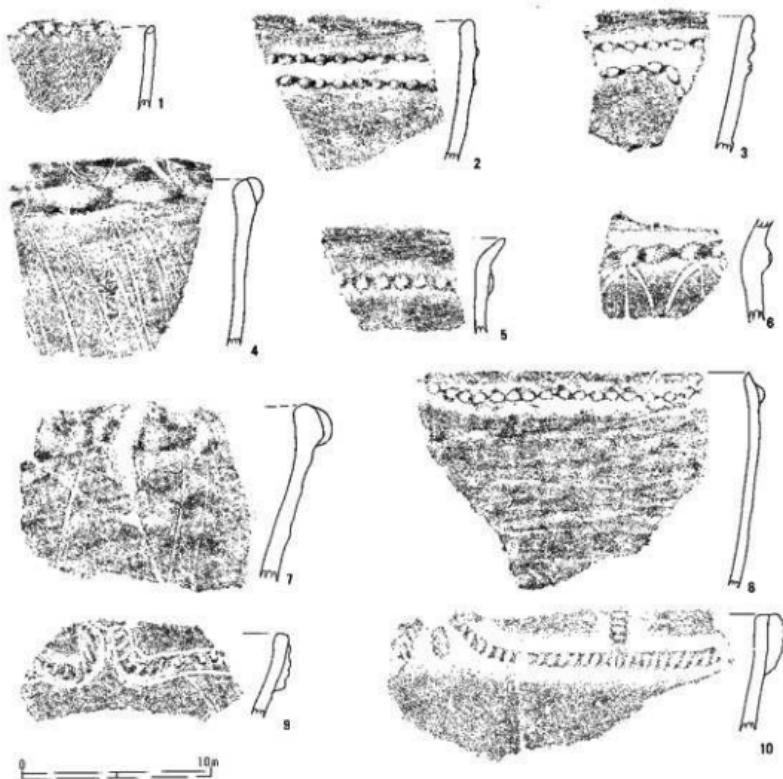
- ①4群3類との関連で検討すべき土器であるがここに記載した。山形の口縁部破片で、内外面と



第7図 第5群3類～5類土器 (1/2)



第8図 第5群5類～7類土器(1/2)



第9図 第9群土器(%)

もに巻き貝の殻頂部を刺突したとみられる渦巻き状の文様が2個ずつ付けられている。またその周囲には同じ貝殻の縁による疑似繩文状の連続圧痕文がみられる。第8図8。

②「く」の字形口縁の深鉢形土器で、4条ほどの凹線が平行する。10・13があるが、13の胴部には羽状沈線の一部が認められる。

③凹線間に刺突文がみられるもの。14・15がある。14の胴部には羽状沈線の一部が見られる。

④11・12がある。②③を基本とするがさらに押圧のある棒状の貼付文のみられる土器。11では胴部に羽状沈線がある。

⑤9は外反する口縁の深鉢形土器であるが、平行沈線上に巻き貝の側面圧痕とみられる押圧文が認められる。胴部には条痕が走る。

以上について、8は元住吉山I式系の土器であろうか。また9の貝殻文は宮滝式や北陸の井口II式にみられる「扇状文」に共通するものと見られる。

7類 沈線を持つ波状口縁の深鉢形土器を一括した（第8図16～21）。

いずれの土器も口縁の波状と平行に肥厚した幅広の沈線文帯がみられる。16ではこの沈線文帯に繩文が施されている。17・18は特に沈線文帯が広く類似しているが、18は波頂部が突出するとともに、稲妻状沈線もみられる。このような稲妻状沈線は19ではさらに確実に施文されている。20・21は波状の高さに差があるものの、文様構成は類似している。これらの時期については後期後葉全体におよぶ時間幅でとらえる必要がある。報告書では18のような大把手をⅠ期、19をⅡ期、20をⅢ期とした。

第9群土器 紐線文縁土器およびそれに類する隆線上器を一括した（第9図）。

1は地文繩文で口縁に有刻の隆線が走る。2・3は2条の紐線。4・7は幅広の紐線と胴部に斜沈線。5・6では頸部に走っている。8～10は曲線状の隆帶であるが、特に10では円形の貼付文や縦方向の隆線も付けられている。

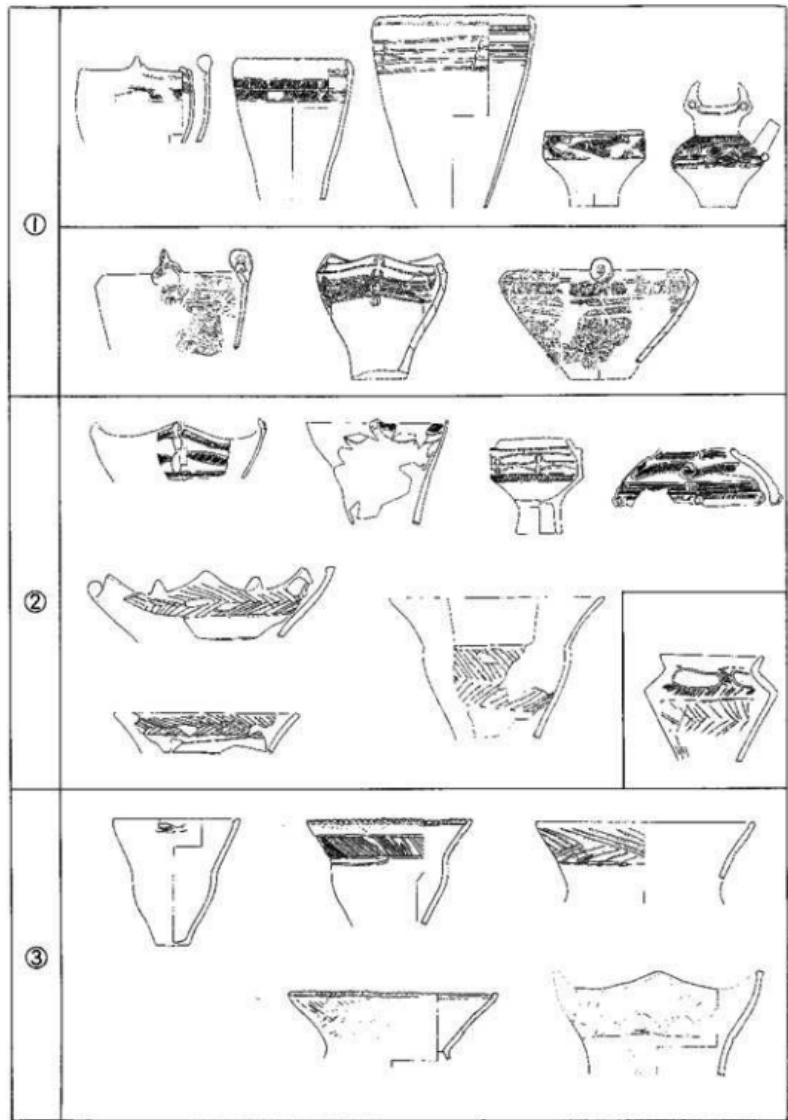
1～7は4群土器に、8～10は5群土器にそれぞれ伴うものと思われる。

3まとめと課題

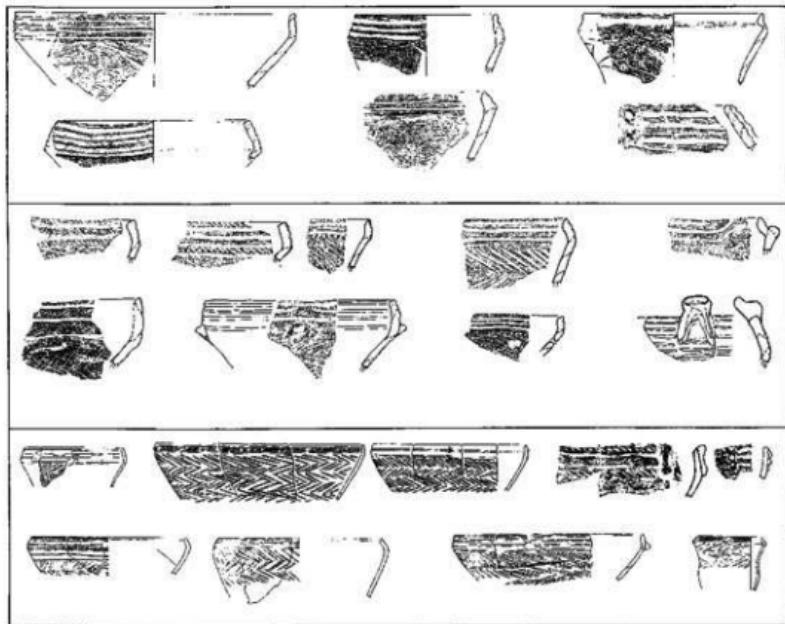
(1) 第4群土器について

山梨県内における加曾利B式土器の様相については資料が少なく不明な点がまだ多いが、県北部にあってのやや纏まつた資料としては大泉村姥神遺跡²、高根町青木遺跡³、明野村清水端遺跡⁴などがある。清水端遺跡は加曾利B1、2式土器を中心とし、姥神遺跡・青木遺跡は加曾利B1式を中心としながらも加曾利B2・3式を加えながら後葉期までの土器が出土している。これらの編年的な位置付けや問題点については櫛原功一氏により検討されている⁵ところであるが、さらに金生の例を加えると特に加曾利B1式および2式の前半段階までは本県北部における該期の特徴を相当明確にとらえることができよう。一括資料としては金生37号住居・姥神6号住居が加曾利B1式、金生23号住居・清水端2号住居が加曾利B2式に位置付けられるものである。これに続く時期の一括資料には金生4号住居があるが、これ以降加曾利B3式期については資料も少なく検討すべき問題は多い。特に今回報告した深鉢H～Lのような羽状沈線土器群や深鉢Fとした「く」の字形口縁の繩文帯の土器については注意したい。羽状沈線は加曾利B2式から始まり、3式を経て5群土器（後期後葉）さらには晩期前半まで連なる手法であるが、時期によりいくつかの違いがある。例えば5図（6～15）と6図（1、4～8）や8図（11、13）にみると4群と5群とでは沈線の密度や太さに差異が認められる。同様に4群内にあっても2類と3類、あるいは3類の中でも差異がある可能性も考える必要があろう。第5図14や15・16の羽状沈線が6～13と異なっているのも時期差なのかもしれない。

また、4図8に示した「く」の字形II縁の繩文帯をもった深鉢形土器も問題である。金生遺跡では少なくまた小破片のため詳しい検討ができなかったが、姥神遺跡では類例がやや多く、報告書でもふれたように5群1類に繋がる可能性のある土器として注意したい。



第10図 北巨摩地域の第4群土器（各報告書より抽出）



第11図 県内の5群土器（1類中心）（各報告書より抽出）

このように4群土器については特に後半段階に問題があり、本県における地域的な特徴を踏まえる中で、後期後葉も含め検討する必要があろう。

(2) 5群土器について

後期後葉とみられる上器を5群として包括したが、多くの地域の影響下に構成された土器群としてとらえられた。資料は少なく、全般的にみても先の姥神・青木に加え都留市中谷遺跡⁶、高根町石堂遺跡⁷に纏まった資料がある程度である。姥神遺跡では金生1類bとした羽状沈線「く」の字形深鉢や6類bの凹線文系深鉢などが少量ながら出土している。青木遺跡ではさらに出土量が多く、加えて安行系の破片も認められている。また中谷遺跡では後期中葉から晩期前半を繋ぐ土器群として、金牛5群のうちの1類～7類までの土器が出土している。この5群を構成する土器のそれぞれの共伴関係や位置付けについてはまだ資料にも限りがあり確定はできないが、少なくとも奈良泰史氏の提唱した加曾利B2式から清水天王山式まで連なる「羽状沈線文土器群」を軸として、曾谷・安行系、東海西部の凹線文系、東北のコブ付土器系などそれぞれの共伴関係から組み立てて行く必要があろう。

報告書では5群Ⅰ器をI・II・IIIの3期に分類してみたが、羽状沈線文土器については縄文の付く1類a（第6図1・4・7等）と沈線だけの1類bとを果たして時期差と考えるべきなのか問題は残る。これまでa種については曾谷式・高井東式併行（奈良氏・百瀬氏）⁶、b種については安行1式併行（奈良氏）、安行1・2式併行（百瀬氏）、ab種含め曾谷式～安行1併行（柳原氏等）⁷などのとらえ方が示されている。加曾利B3式からの展開に加え、深鉢の器形や口縁部の平行沈線などの特徴については東海西部地域からの影響も含め、資料の増加を待って検討していただきたい。なお、高井東遺跡第7号住居⁸などからはこれら1類Ⅰ器に類似したものとともに7類とした人形波状口縁の深鉢も出土しており、関東地方西部を含めそれらとの関連も考慮する必要があろう。

註

- 1) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集『金生遺跡』（縄文時代編）山梨県教育委員会 1989
- 2) 柳原功一『姥神遺跡』大泉村教育委員会 1987
- 3) 南宮正樹・山下孝司・柳原功一「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』2 山梨県考古学協会 1988
- 4) 宮沢公男『清水端遺跡』明野村教育委員会 1986
- 5) 註2)と同じ
- 6) 奈良泰史『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会 1981
- 7) 南宮正樹『西ノ原遺跡・石堂遺跡』高根町教育委員会他 1986 この概報によると遺跡の中心時期は後期中葉をはさんだ前後とされている。
- 8) 註6)
- 白瀬長秀「羽状沈線文をもつ土器の系統と展開」『長野県考古学会誌』49 1984
- 9) 註2)および註3)と同じ
- 10) 埼玉県教育局文化財保護課文化財第二係『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会 1974

両の木神社遺跡出土の須恵器長頸瓶について

出月洋文

1はじめに

- 2 両の木神社遺跡について
3 出土須恵器の観察

4 出土長頸瓶の年代とその性格をめぐって

- 5 おわりに

1.はじめに

山梨県立考古博物館では、1992年2月18日から3月15日の間、「やきものの歴史」と題したたいへんささやかな企画展を開催した。これは当館（県埋蔵文化財センター）が収藏する県内の出土資料の中から、残欠や小片も含めた200点ほどにより、縄文土器に始まり近現代の陶磁器に至るまでの流れを概観しようというものであった。

その中にやはり須恵器の変遷を扱う部分がおかれたのだが、展示資料選定の段階で、壺蓋の類もさることながら、一般に見覚えがする壺の仲間にある程度比重がかかっていった。

須恵器の流れを紹介する以上、当然のこととして個々の資料の年代を明確に把握することが前提となる。これについて急ぎいくつかの参考図書や編年に関する論考などに目を通したのだが、比較的研究の豊富な壺類などはともかく、ここで取り上げようとするような器種の須恵器についてはその確かな年代観を得ようとするのに、なかなか容易ではないことが痛感された。

さて、そのようなわけで本稿で取り上げようとする両の木神社遺跡¹出土の須恵器長頸瓶も、同様なものが県内の後期古墳から出土する須恵器群の中に散見されたりすることから、当初は古墳時代後期であろうという見込みで、その一、二を展示リストにあげ、作業を始めたのだが、しばらくして再確認の意味でも一度その帰属時期の検討を試みたところ、最終的に後述するような理解に及んだ。ここでは資料の改めての観察とともに、その年代観やこの遺跡での在り方などをめぐって検討してみたことをまとめて提示してみたい。

なお、ここで扱う須恵器の器種名についてであるが、発掘調査報告書では「長頸壺」として報告されている²。しかしこの種の須恵器については、むしろ「長頸壺」ないしは「長頸瓶」と呼ばれることが多い。平城宮跡出土の須恵器の器種表³では「壺K」ないしは「壺L」に相当すると思われるが、ここではその両者にまたがる器種を一括して扱い、「壺の中でも頸部の細いもの」を「瓶」とする理解⁴から、長い頸の瓶すなわち「長頸瓶」として記述を進めたい。

2 両の木神社遺跡について

(1) 遺跡の概要

両の木神社遺跡は、東八代郡一宮町末木に所在する両の木神社の周辺に広がる古代集落遺跡である。金川扇状地の扇尖部で、付近の標高は350m前後となっている。この遺跡の環境を見るなかで、とりわけ注意されるのが甲斐の国分寺跡の所在地にたいへん近いという点である。南西700mのところには国分寺跡が位置し、西方200m足らずで国分尼寺跡の推定寺域にさしかかるという位置関係にあり、いわゆる国分寺遺跡群の一角をなしている¹⁰。この両の木神社遺跡は、両の木神社の境内地とその北、西、南側の隣接地を含めたごく限られた範囲であるが、東には車地遺跡、南には竜ノ木遺跡、そして西側は国分尼寺遺跡と、遺跡そのものは連続して広がっている。

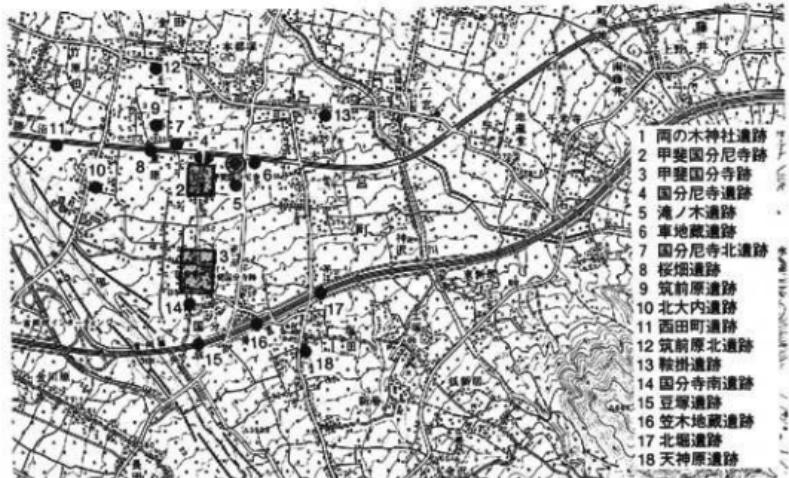
この遺跡が最初に確認されるのは『一宮町誌』¹¹によってであり、その第二章の「土師発見一覧表」にいわゆる国分期の遺物散布地としての報告が見られるものがそれである。以後、これまでに開発事業などにともない、遺跡の隣接地も含めて数度の発掘調査が実施されている。

その最初の発掘調査は1971年のことで、両の木神社境内の東側を広域農道が通過することになり、このときの県教育委員会による調査の結果、幅10mほどの道路予定地から平安時代の竪穴住居5軒が確認されている¹²。

また1974年には、両の木神社の北側を、先の広域農道と直交して計画された国道20号線勝沼バイパスの建設にともない発掘調査がなされ、幅25m余りの道路敷内に、奈良時代住居2軒と平安時代住居14軒が同じく県教育委員会により確認されている¹³。

今回の検討資料に取り上げた須恵器群を得ることになった調査は、1987年に県埋蔵文化財センターにより実施されている。すなわち灌漑事業関係の送水管埋設工事に伴う発掘調査として、幅2mほどに神社境内の北よりの部分を横切る形で行われたものである。

さらにその後も、一宮町教育委員会によって、各種の事業に関連した調査が継続されて来て



第1図 両の木神社遺跡の位置と周辺の遺跡

1おり、木遺跡を含め、國分二寺周辺の古代集落の展開の全容が次第に明らかにされつつある。

(2)出土状況の確認

さて、資料の理解に不可欠と思われるため、資料の検討にはいる前にもう少し、1987年の調査により明らかにされた状況の細部を確認しておきたい。

この調査で明らかにされた造構は、遺跡内をほぼ東西に横切る形の細長い調査区の中で、両の木神社の拝殿の真北にあたる位置に確認された南北方向の溝状造構1本だけである。溝状造構は検出面での幅が約10m、このレベルからの深さは1.5mあまりである。また溝状造構の底面は、幅が3mほどで、30cm内外の自然石が多く転じており、河原のような貌を呈している。この底からの立ち上がりは、東側では急であり、それに比べ西側ではいくぶんなんだらかで、中位に幅の広いテラスを有している¹¹⁾。

溝状造構にかかる遺物として報告されているのは、堆積の下部からの鉄鏃と丸瓦など、そして西側立ち上がりのテラス上に集中して見られた須恵器群が主だったもので、これらのはかに9世紀代の土師器の破片資料もかなり多く見られている。

3.出土須恵器の観察

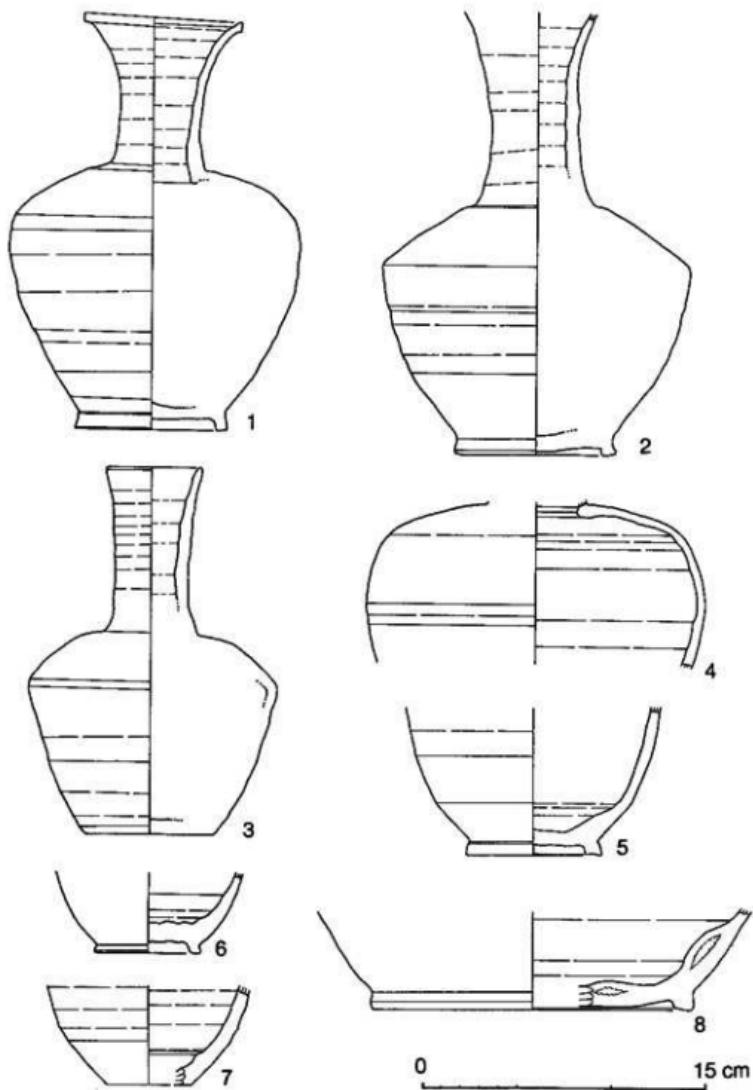
つぎに、この溝状造構の西側テラス部から集中的に出上した須恵器群について、本稿の主題となっている長頸瓶を中心に、報告書よりも一歩踏み込んで資料の観察¹²⁾を試みたい（第2図参照）。

資料1（報文第5図の3）

ここで出土した長頸瓶のうち、「もっとも残りの良いものの一つで、全体の約85%が残存する。残存部分での器高は21.5cm、推定の口径8.4cmである。肩が丸みを帯びたイチジク形の体部（最大径は15.5cm）に、口縁がラッパ状に開く長さ7.8cm、最小径4.3cmの口頸部を接合させるが、やや傾きが見られる（この傾きのため図上復元で得られる器高は21.9cmとなる）。底部には高台を有し、その径は8.2cmと座りが良い。色調は、基本的には灰色だが、窯の中での火のまわりにより片面がいくぶん赤褐色がかっている。胎土には1~2ミリの砂粒が立つ。外反する口縁の端部の形状は、内外面をナデにより薄くした後、ほぼ垂直方向に面を取っている。口頸部の内外面から体部の下半まで横ナデ調整が施されるが、最大径をもつ辺りから下のナデはゆるく、成形の際の積み痕かと思われる横方向の凹線が見られる。体部の最下部には2段の軽いヘラ削りがなされ、底部もヘラ削り調整した後、断面が方形の高台を付けている。

資料2（報文第5図の2）

残存率およそ75%で、口縁端部を欠くため、現状の器高は23.2cmを計る。器形は、上半に明瞭な稜をもち、そこを最大径(16.4cm)とする体部に、細長い口頸部（現状の長さ約10cm、最小径4.7cm）を接合したもので、色調は明るい灰白色を呈し、体部の肩には部分的に自然釉が見られる。胎土は緻密だがわずかに砂粒を含み、ヘラ削りで壊れるような黒色の微粒子も若干目立つ。口頸部の内外面と体部の下から4cmほどのところまでを横ナデ調整し、その下はヘラ削りとする。



第2図 両の木神社遺跡 須恵器長頸瓶実測図

底部にも回転ヘラ削りによる調整が見られ、その径 8.8cmの付高台は比較的幅広で低めに付けられている。

資料3¹⁵

器高19.3cm、推定口径が 5.2cmで、高台をもたない。口縁があまり開かず、口縁部端のつくりが単純な筒状の口頭部と、上半にさほど鋭くない棱をもつ体部とが接合された器形を成し、体部最大径13.4cm、平底の底部径は 7.0cmとなっている。口縁部と体部上半に欠損が見られ、残存率は85%ほどである。色調は明るいやや黄褐色をおびた灰色で、緻密な胎土には小さな砂粒がごくわずかに見られるほか、黒っぽい小さな粒子が観察される。口頭部の内外面と底から4cmほどのところまでの体部外面を横ナデ調整し、体下部と底部はヘラ削りがされている。

資料4（報文第5図の8）

口頭部をその接合箇所から欠いた体部上半の3/4からなる資料（残存部の割合は約15%程度で、残存高は 8.5cm、体部の推定最大径は18.0cmとなっている。器形は資料1と同様なものと見られ、口頭部の剥離痕から、その接合部での径は 5.2cmほどで、体部の大きさからしても資料1より一回り大きな長頸瓶であったといえよう。肩部には暗緑色の自然釉が顕著に認められる。器内が比較的薄く、胎土は灰白色を呈し、緻密で、わずかに砂粒が入っている。内面はロクロ調整の痕をとどめ、外面は横ナデ調整により丁寧に仕上げられている。

資料5（報文第5図の5）

体部下半から底部にかけての3片からなり（残存率約15%）、残存高は 7.8cm。4分の3ほどが残る底部には高さ 5ミリの幅広の高台が付き、その外径は 7.4cmとなっている。現存の体部の器壁の立ち上がりからすると、いくらか細目の体部をもつ長頸瓶であろうと思われる。内面にはロクロ調整が見られ、体部外面は、下から4cmのところまでは横ナデがなされ、それ以下はヘラ削りされている。底部の調整については、ヘラ切りの後に軽くナデ調整がなされているようである。色調はやや黄褐色をおびた灰色で、胎土はたいへん緻密である。

資料6（報文第5図の4）

体下部から底部にかけての、本来の形の10%程度の破片である。残存高は 4.2cm、高台を有する底部の径は 5.7cmとなっている。内面はロクロ整形の痕が明瞭で、外面は横ナデ調整がなされ、普通に見られる体下部のヘラ削りは観察されない。色調にはむらがあるものの基本的には黒っぽい灰色で、胎土には1~2ミリの長石粒が混じっている。

資料7（報文第5図の7）

体部下半から底部にかけての破片である（残存率約10%）。残存高は 5.2cmである。底から2.3cm辺りまでがヘラ削りされ、それより上部は横ナデ調整されている。底面も回転ヘラ削りが観察され、高台はもたない。また体下部のヘラ削りも角度がきついので底径は 5.2cmとたいへん小さくなっている。色調は暗灰色を呈している。

資料8（報文第5図の6）

大きめの長頸瓶の体下部から底部にかけての破片で、本来の形の5%前後に過ぎないものである。残存の高さは 5.7cm。高台の付く底部の径は17.0cmに復元できる。体部外面は横ナデ。底部

では中心部で回転ヘラ切りが見られるが高台よりの部分ではナデ調整がなされている。色調は灰白色。緻密な胎土で少々黒色の粒子が目立つ。

以上が本稿で検討をおこなう資料のあらましだが、このほか須恵器としては、今回は長頸瓶に器種を限定して検討を行うこととしたため、ここには図示しなかったが、甕が1点（報文第5図の9）存在した。

4.須恵器長頸瓶の年代とその性格をめぐって

(1)器形の細分

前節で見て来たように両の木神社遺跡の溝状造構からまとめて出土した須恵器（以下、両の木例とする）には、破片を含めて8点の長頸瓶が存在した。これらについてさらに細かな分類が可能かどうか検討してみたい。もっとも前節での観察結果でも分かる通り、残存率が7割を越えるものは3点で、しかも肝心な口縁部形態が判明するのはそのうちの2点しかなく、残りは本来の器体の2割以下でしかない資料であって、細分にどこまで有効性があるか少々心もとないが、資料を群として見ようとする立場から、若干なりとも類別を進みたい。

長頸瓶という器種について、器形や技法によって細分するのには、口縁端部の作り、台・脚の有無、肩にある稜の形の形状などが大きな指標として挙げられ、さらに口頸部の長さや開き具合、頸部と体部の接合の仕方、体部の偏平率なども勘案されなければならない。しかしここでは資料の制約から、高台の有無を主として次のように類別を行う。

a類 高台をもつもの

8点の長頸瓶の中で、資料1・2・5・6・8に高台が見られる。資料4についても肝心な底部は欠失しているが、資料1とほぼ同様の器形をとると推定されるのでa類の中に含めておきたい。

高台は、すべて張り付けによるものと見られるが、高台の幅や高さ、断面形状において、みな微妙に異なっている。この点は、長頸瓶の変遷の中での一定の歴期の幅を越えるほどのものではないと思われる。

このa類は、体部上半の形状でさらに二つに分けられる。一つは肩が緩やかなカーブをえがくものの（a類-1）で、もう一つは体部上半に強い屈曲をもつもの、別の言い方をすれば肩に稜をもつもの（a類-2）である。a類-1には資料1と資料4があり、a類-2には資料2が相当する。他のa類の資料5・6・8については体部下半のみであるため、いずれになるか分からぬが、一つの見通しとして、長頸瓶の成形技法として通用の体部下半の数段のヘラ削りが、a類-2においては明瞭に観察されるのに対し、a類-1では消極的に行われる傾向があるようと思われ、このことに妥当性が高ければ、資料5はa類-2に、資料6はa類-1に含まれることになる。また資料8は底径が17cmと大きなものであるが、こうした大型長頸瓶は一般にa類-2の器形に限られるようである。

ところで、ここでa類としたような長頸瓶の口縁には、ふつうラッパ形に開く口縁の端部を単純にまるくおさめるものと、端部をロクロ回転を利用しながら押つけ、端部の断面が三角形のようになる装飾的な口縁端にするものとがある。とりわけ後者のような口縁端部をもつ長頸

瓶については、その部分の作りが产地や年代を考える上で重要なポイントの一つとなるが、本資料群の中では肝心な口縁端部を残すものはa類では資料1のみである。口縁直下までありながらその端部を欠失する資料2においても、どのような口縁端部をもっていたのかを理解するのは難しい。よって口縁部形態をもつての分類はあきらめざるを得ない。口頭部の長さや開き具合についても同様である。

なおこのa類について平城宮跡の須恵器に関する器種分類に当てはめて見ると、a類-1は「壺L」、a類-2は「壺K」に相当するものといえる。

b類 高台をもたないもの

b類に属するものには、資料3と資料7がある。b類の器形は一般に体部上半に稜を有し、口縁の作りも単純におさめるものが基本形である。資料7については体部下半のわずかな残りしかないが、恐らくこうした器形をとるものと思われる。やはり平城宮跡での器種分類に当てはめると、「壺K」で高台のないものということになろう。

(2)年代

ここでは検討資料の年代について再検討を試みたい。

というのは、報文では須恵器の年代について、結論的に「6世紀後半から7世紀前半」という範囲が与えられているが、同時に土師器については「9世紀後半」とされ、また溝状造構からはもともと国分寺所用のものと考えられる丸瓦が確認されているなどの事実があり、須恵器の年代の上限を6世紀後半までもって行ったとき、溝状造構をめぐる遺物にたいへんな年代幅が出てしまう。後で述べるように遺跡の周辺事情を考え合わせながら見ても、この須恵器の年代に検討の余地があるよう思われる。

ところで須恵器の編年的な研究を行う場合、特にその生産地である窯場の資料が大いにものをいうが、本県でこれまでに確認されている須恵器生産にかかわる窯跡といったら、7世紀初頭の境川村下向窯跡⁴⁾、7世紀後半の境川村牛居沢窯跡⁵⁾、同じく7世紀後半の瓦陶兼業の敷島町天狗沢瓦窯跡⁶⁾などが挙げられるだけである。さらにこのうち下向窯跡については若干の採集資料が報告されているのみで、詳細については不明であるし、また後二者についてもその時期の在地窯業の実態を垣間見るには非常に重要なものではあるが、それだけで山型における須恵器編年を組み上げるほど豊かなものではなく、とりわけここで問題とする長頸瓶の年代を検討するに足る資料にはなり得ていない⁷⁾。そこで本例のような須恵器の年代を検討するとなるとやはり陶邑窯なり、猿投古窯なり、美濃須衛窯なり、また湖西古窯なりの生産地の調査研究で確立している編年を援用して行かなければ前に進まない。

田辺昭三氏の陶邑編年⁸⁾では、長頸瓶はⅢ期に入ってから、すなわちTK-217あたりから登場してくる器種であるとされ、Ⅲ期を通して供膳用の器形として重要な位置を占めるが、次のⅣ期を迎えると消えてゆくものとされている。年代的には7世紀前半から8世紀半ば過ぎまでということになる。陶邑窯における長頸瓶は口頭部と体部のバランスがよくとれ、底部には安定のよい脚台、高台を付けているが、まったく台をもたないものもある。体部が偏球形で、ふん

ばかりの効いた長めの脚をもつものが古式に属し、Ⅲ期前半以降しだいに体部は長くなり、台は短小化していくという変遷が指摘されている。ここで検討資料のうちa類-2のような器形はMT-21あたりから見られるようである。なお、長頸瓶という器種が消えるⅣ期というのは陶邑窯では衰退期に当たるが、そこでは姿を消してゆく器形の須恵器も地方窯では生産が続くという。

MT-21というと陶邑Ⅲ期も後葉になり、平城京の時代に入る。そこで平城の宮跡や京跡の資料に目を転じてみると、a類-2の資料2に類似したものに平城宮Ⅱ期のSD485出土例²⁰などがあり、またb類では、平城宮Ⅳ期前半の時期のSB7802出土のもの²¹などが、器形的に資料3とたいへんよく似通っている。それら平城宮跡（ないし京跡）の須恵器に与えられている実年代を適応して考えることが可能なら、両の木例もおよそ730年頃から760年頃の間ということになろうか²²。

次に尾張や美濃地域の窯業遺跡での長頸瓶の出現について見ると、美濃地域がやや先行して7世紀の第4四半期とされ、尾張地域でも続いて7世紀第4四半期の後半には長頸瓶が確認されている。両地域とも7世紀代では、脚の形態が「ハ」の字形に開いたものであるが、700年をまって程なく短めの脚、すなわち高台といえる状況に変わっていくのが確認される²³。

ここまで見たところでは長頸瓶という器種そのものに付される年代は、大まかにいって7ないし8世紀となってくるが、このような時期にもう一つ注目される窯業地に湖西占窯がある。ここではすでに、後藤健一氏を中心比較的大規模な窯跡群の実態把握と編年モデルの確立がなされている²⁴。後藤氏の編年観によると湖西占窯での長頸瓶は、その機軸となるA類が6世紀末から7世紀初頭に捉瓶から変容して成立した、体部を偏球形にしたいわゆるフラスコ形瓶をその初期段階として現れ、湖西古窯第Ⅲ期第3小期の前半、すなわち7世紀後葉（671～681年頃）に高台が付くようになり、定形的な長頸瓶として発展する。こうした長頸瓶A類は湖西古窯V期になると、すなわち8世紀の中頃になると消え、代わりに短めの口頭部とその口縁端部を横ナデ調整して直立させた（端部断面が三角形状になる）器形のB類が主体となる。

そこでこの両の木例の須恵器を湖西古窯編年モデルに対比させて見ると、両の木例a類-1は湖西長頸瓶B類に比定され、湖西古窯V期、8世紀後半と位置付けることができよう。a類-2については口縁端部の形状が分からぬため、湖西長頸瓶A類の系列ないしはC類としてとらえられるが、いずれにしろ湖西古窯Ⅳ期あたり、8世紀の初頭から第2四半世紀前半頃と見ることができる。また両の木例b類は、湖西長頸瓶ではD類に当たり、湖西古窯Ⅳ期3段階、8世紀第2四半世紀の前半に位置付けられそうである。湖西古窯編年によても両の木例の年代幅は8世紀初頭から8世紀後半にかけてということになり、先ほどの平城宮跡の資料との対比結果と矛盾しない。

このほか直接両の木例の器形と一致する資料は見いだせられないものの山梨周辺で目についた窯業地の状況を補足すると、長野県下でも近年須恵器窯の調査研究が各地で進んできているが、その一つに松本平での調査をもとにした小平和夫氏による詳細な編年研究²⁵がある。そこで長頸瓶は器形によりA・B・Cの3類別が行われ、それぞれに変遷が示されている。このうち長頸瓶C類はいわゆる「兼G」に相当するため、ここでは両の木例a類-1と同様な器形の長頸

瓶 A 類と、a 類 - 2 と同じ長頸瓶 B 類の在り方に注目すると、前者は 8 世紀に入って登場し、9 世紀半ばまで多く見られ、灰釉陶器長頸瓶に席を譲りながらも 10 世紀初頭まで存在している。また後者については 8 世紀の初頭から後半にかけてのものが知られるが、こちらは大方が美濃須衛窯産と見られることがある。

また関東でも多摩ニュータウン No. 342 遺跡、同 No. 513 遺跡、埼玉県鳩山窯跡群など²⁰ の窯業遺跡で長頸瓶の生産が確認されている。年代的に見ると、No. 342 遺跡が飛鳥 I 期から平城宮 I 期段階、No. 513 遺跡が平城宮 I 期併行、鳩山窯跡群で平城宮 I 期以降にとそれぞれ位置付けがされている。

この項での以上のような検討をまとめると、長頸瓶という器種は、フラスコ形瓶をその祖形として 6 世紀末から、一般的には 7 世紀前半から 8 世紀の初頭にかけての間に陶邑窯以下各地の窯業遺跡で生産が開始され、一部を除いて 8 世紀代を大きく出ることなく終焉を迎えるものといえる。そうした中で両の木例の年代として、およそ 8 世紀初頭から 8 世紀後半にかけての幅が適当ではないかと思われる。

(3) 性格をめぐって

さて前項で検討した結果、これらの須恵器長頸瓶群そのものの帰属時期は、少なくとも古墳時代ではないといえ、そうなると出土遺構である溝の性格としては、報文で可能性の指摘のあった古墳の周溝というのではなく考えにくくなる²¹。

ちなみに遺跡周辺の後期古墳の分布状況を見ると、第 3 図に示すごくである。もっとも距離的に近い国分築地古墳群²² でさえ、その分布域と両の木神社遺跡とは国分二寺をはさんでかなりの隔たりがある。ここに古墳を想定した場合、想定される時期の古墳としては、まったくほとんど単独で存在したとは理解しにくく、仮に国分築地古墳群がもう少し今確認できるより広い範囲にあって、それが国分二寺の建設に伴い、建設予定地周辺の古墳が取り払われたとでも



第 3 図 甲斐国分寺周辺における古墳群分布

いわぬいかぎり、なかなか説明しきれない。藤原京や平城京の建設の際にはその予定範囲にかかっていた古墳がいくつか方付けられていることは、発掘調査によても確かめられているが、国分寺の造営の場合については、そうしたことはその趣旨からして、またいわゆる国分寺建立詔に示された立地条件³⁰からしても、かなり考え難いことではないかと思われる。これまでの国分二寺跡周辺で行われてきた発掘調査でも、ほかに古墳を取り壊したようなデータは今のところ得られていない。

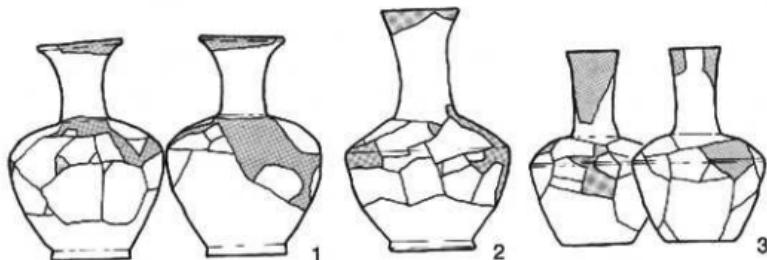
問題の溝状遺構については、これまでの須恵器長頸瓶の年代についての検討やまた遺構内に9世紀代の土師器片が見られることから、やはり古墳の周溝であるよりは、奈良時代以降の人工的な大溝というほうが妥当性が高いと思われる。

この大溝が開削された時期についてもう少し絞り込むことはできないだろうか。遺跡周辺の状況を考え合わせた場合、その時期をある程度限定して行くことはたいへん重要な問題である。これについて明確な年代をいえる手掛かりはないが、少なくとも出土遺物のうちの須恵器長頸瓶のもつ年代幅の中で、最も新しい部分、すなわち8世紀の後半には機能をしていたと考えられる。さらにいえば、大溝の規模や遺跡周辺の状況等を勘案して、恐らく国分二寺の造営開始とほぼ前後するころの開削と考えるのが適当ではないかと考えたい。溝状遺構の下層の遺物に古代の丸瓦や平瓦（おそらく国分二寺所用のもの）が混じていた点も、そうした理解になじむものといえよう。

つぎにこの大溝の西側立ち上がり面に見られたテラス部分からまとまって確認された須恵器長頸瓶群について、どのような性格付けが可能なのか検討してみたい。

まずこの問題の検討の前にいま一度資料そのものに立ち返って、その残存状況について確認しておこう。出土須恵器には、先にもふれたように8点の長頸瓶と1点の甕があった。それらはみな破片の状態で検出されている。

特に長頸瓶については、残存率が7割余りのものが3点、そして2割以下が5点となっている。残存率の高い前者はどれも10片以上の大小の破片になっており、意識的に破砕されたのではないかと考えさせられる。もともとの器体のほんの一部しか残らない後者の中にもそうしたことが



第4図 長頸瓶の割れ状態（スクリーントーン部は欠損部分を示す）

読み取れる。第4図に前者3点の割れの状況のスケッチを示した。3点に共通していえることは、①たくさんの破片になっている、ということのほかに、②口頸部と体部との接合部で割れが一周している、③口縁部の一部と体部の一部にまとまつた欠損箇所が見られる、といった点も指摘できる。このような観察結果から、長頸瓶はまず口縁部の一方が強打され、それによって体部と口頸部とが離れ、さらに体部の一方に打撃が加えられ、そのようにして意識的に破碎されたと考えられるのではないかと思われる³⁰。この3点以外の長頸瓶の残欠も、同様にして破碎されたもの一部が、限られた調査範囲の中で検出されたものと考えたい。

だが何故に大溝の傍らに、打ち割られた長頸瓶がまとまって残されていたのだろうか。この大溝について、川のように流れた形跡は認められないと報告されている³¹。発掘調査では水流についての形跡がはっきり出なかったとはいえ、これだけの大溝であれば多めの降雨などのときには当然、一時にしきる程度の流れがあったのではないかと思われる。また流水が當時無くとも、これだけの大溝には流れという意識がもたれたこともあったのではないかと思われる。

つまり須恵器長頸瓶は、溝（あるいは流れ）の傍らで何らかの意図をもって粉々に碎かれると推測されるのである。7世紀代の長頸瓶の在り方の分析から、長頸瓶という器種に祭祀性が指摘されている³²。そうした長頸瓶に内在する伝統をつなぎあわせて飛躍的に言えば、破碎された長頸瓶は、何らかの祭祀的な行為を物語るものかもしれない。

ここで長頸瓶という器種が、古墳以外に、祭祀的な色合いを強くもちながら出土しているという具体例を一つだけ挙げておきたい。群馬県鳥羽遺跡³³での例がそれである。この遺跡は周辺に上野国分寺跡や推定上野國府跡が近接して存在し、律令期の上野國の中心地域と理解されるところにある。1978年から84年にかけての関越自動車道関連の発掘調査により、奈良～平安時代を中心とする大規模な集落跡が出土し、こうした歴史性を如実に示す状況が明らかにされている。中でも遺跡のほぼ中心部に当たるH区とされたエリアから検出された、たいへん特異な掘立柱建物の遺構の存在が目を引いている。二間×二間の身舎の周間に1辺三間の柱列が巡るほぼ正方形の平面を持つ掘立柱建物で、建物の周りに3重の溝（空堀）と1重の柵列とを巡らされている。溝のうち中ほどを巡る12号溝では、溝の底部より意識的に据えられたような状況のもとに、須恵器の短頸壺と長頸瓶が30点あまり点在し、とりわけその半数ほどを占める長頸瓶については、その頸部が「總て故意に欠き取られたような形跡が伺われ」祭祀的な色彩が強いと、報告者は指摘している。

鳥羽遺跡の場合、このような長頸瓶の在り方は、報文にもあるようにその特異な遺構の性格ともかかわっているであろう。この注目すべき建物については、一つには古代の神社そのものではないかとの推定がある³⁴。いまこの推定が成り立たないとしても、そこで長頸瓶の祭祀的な色彩は色うせるものではなく、遺構の時期が8世紀中葉から9世紀代という年代であることもあわせて、本稿での検討対象の長頸瓶群の性格を考えるうえでたいへん参考になるものと思われる。

また県内の比較的近い例で、長頸瓶ではなく、いわゆる「壺G」と器種を異なるが、甲府市岩塗町出土の須恵器³⁵が挙げられる。8世紀末のほぼ長岡京の頃と年代の近いが、やはり溝ま

たは河川と見られるところの岸辺で、意識的に破碎された状況で検出されたという。須恵器者Gも頸長で、基本的に瓶の仲間として考えることができるものの、これもまた参考になるものといえよう。

意図的に破碎された長頸瓶について、そこに祭祀的な意味合いを見る方向でその出土例を一、二拾い挙げてきたが、これに対し、破碎された長頸瓶にもう一つのケースも知られているのを忘れてならない。最後にその点についてふれておくと、それは平城京右京八条一坊一四坪で最初に明らかにされた漆の貯蔵運搬容器としての長頸瓶における破碎の場合である³⁰。西市に近い一四坪の一角に検出された、奈良時代前半に当たるⅡ期の時期の土坑SK2001からは、漆の付着した土器類などが多量に出土し、それは付近に工房の存在を推定させるものであったが、特に須恵器の長頸瓶を中心とする壺類の占める割合が多く、長頸瓶などが漆の運搬容器として用いられていたことが報告されている。壺類はほとんど破片で出土し、その中には肩部付近に打撃を受けた痕跡をとどめるものがあって、その長頸瓶などの漆容器は最後に打ち割られて中身の漆が搔き出されたと理解されているものである。こうした例はその後藤原京の調査などでも確認され注目されている³¹が、両の木例の長頸瓶の場合については、現状の状態を観察した範囲では、漆の付着は1点も確認されないし、その他漆に関係したと見られる遺物の伴出も見られないでの、このような漆容器としての可能性はほとんど考えなくともよいように思われる。

ここでは以上のように、検討資料の破損状況から考えられることと、若干の類似例を挙げ、両の木神社遺跡出土長頸瓶の性格について検討してみたが、その論旨を確認すると、長頸瓶は溝のかたわらで故意に打ち欠かれたものであり、その行為の背後にいま明確に把握はできないものの、ある種の祭祀性が存在したのではないかということである。

5.おわりに

以上、本資料に関しての再検討をとおして指摘できたことを整理すると、

- 検討資料は、固体ごとに形態的特徴が異なるものの、ほとんどが須恵器の長頸瓶で占められている。
- その年代は8世紀初頭から8世紀後半までの時期を当てることができる。
- したがって検討資料を出した遺構は、古墳の周溝ではなく、国分寺周辺集落の中に設けられた大溝と理解するのが妥当であろう。
- 検討資料に内在する歴史的性格として、長頸瓶という、ある意味で祭祀性をもつ器種で、しかも破碎された状況のもとにあることから、大溝に面して執り行われた何らかの祭祀的行為を物語るものではないかと考えられる。
- 大溝のひとりで長頸瓶が関係した行為が行われた年代は、問題の長頸瓶がもつ時間幅の中の最も新しい部分、すなわち8世紀後半の国分寺の造営開始後のある時期と推測される。

これまで、この小稿では検討資料の年代と、その遺跡での在り方の再検討を試みてきたわけであるが、その検討の進め方に、初めに結論ありき的な感があり、編年的裏付けや資料の性格

付けにかかわって吟味が十分尽くされたとはいえない。むしろ古代における地域社会の実像に迫る作業の系図に、ようやくたどり着いたといえるほどのものかも知れない。今回の須恵器の検討作業は、かなり大まかなものとなってしまっている。今後の課題として、さらに他の器種も含めた8~9世紀の須恵器の編年的位置付けをより確かににして行く作業が必要であろうし、今回は牛座地の特定についての試みも全くできなかったが、検討資料の観察を進めながら同じa類の中でもa類-1とa類-2とで明らかに胎土や焼成について相違が見られ供給事情の違いによるものではないかと感じられ、供給地の検討も残されている。さらに、こうした出土例が一般化しうる事象であるかどうか。またこの遺跡が甲斐の国分寺の展開と強く関連する位置関係にあることも含め、その背景社会の把握などが考えられる。これらについて機会をみて、あらためて考察を加えてみたい。

最後に、資料の再検討についてご理解いただいた調査担当者の小野正文氏、有益な助言や示唆を与えていただいた信藤祐仁、瀬田正明両氏に末尾ながら感謝の意を表したい。

註

- 1) 特別展や企画展は、ふつう①一定の研究成果に基づいて構成されるもの、②常設展示のある部分を補って、ないしは解説的な意味を持たせて企画されるもの、③小学生などでも十分理解でき、その領域に親しみがもてるよう意図されたもの、などいくつかの在り方があると思うが、この展示は②の位置付けで開催された。なお予算上の制約でこの内容についての図録類は刊行されていない。
- 2) 小論の主材料である須恵器は、山梨県教育委員会ほか 1989『下長崎遺跡・両の木神社遺跡』所載の両の木神社遺跡の本報告にもとづいている。
- 3) 例えば四ツ塚1・2・6号墳(山梨県教育委員会ほか 1985『四ツ塚古墳群』)、积迦堂1号墳(山梨県教育委員会ほか 1986『积迦堂I』)など。
- 4) 註2) 前掲報告書。なお調査当年度に公表された概報(山梨県埋蔵文化財センター 1988『両の木神社遺跡』『年報』4 p.25)では「長頸壺」の呼称を採用している。
- 5) 奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告書IX』の別表5による。
- 6) 出田昭三 1981『須恵器大成』角川書店 の本文 p.14。
- 7) 一宮町教育委員会ほか 1991『金山遺跡』の p.1。
- 8) 一宮町役場 1967『一宮町誌』の p.217~218。
- 9) 山梨県教育委員会 1972『甲斐国国分寺周辺聚落の調査(予報)』
- 10) 山梨県教育委員会 1974『古代甲斐国の考古学調査』
- 11) 註2) 前掲報告
- 12) 再実測を行いながら観察を進めた。以下の計測値、推定値はその実測図にもとづく。
- 13) 資料3は発掘報告 註2) 前掲書の写真図版には示されているが、実測図は載せられていない。
- 14) 橋本博文 1979『甲斐における須恵器生産』『丘陵』6 甲斐丘陵考古学研究会 p.1~4

- 15) 山梨県教育委員会 1990 『山梨県生産遺跡分布調査報告書』
- 16) 敷島町教育委員会 1990 『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』
- 17) 明確に長頸瓶といえるような器形の資料は、報告された中には見られない。
- 18) 註6) 前掲書
- 19) 奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告書VI』
- 20) 奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査報告書IX』
- 21) 岡の木例a類-1については、平城宮跡の報告書であたることができた範囲では、年代を同定できるようなものが認められなかった。
- 22) 比田井克仁 1991 「--地方窯成立の史的契機」『研究論集』X 東京都埋蔵文化財センター p. 373~403
- 23) 後藤健一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会 p. 218~381
- 24) 小平和大 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1』 (財)長野県埋蔵文化財センター p. 97~158
- 25) 註22)前掲論文
- 26) 註2) 前掲報告では、須恵器の年代を6世紀後半から7世紀前半とする前提にたって、古墳の周溝としての理解に比重を置いていたが、調査当年度の概報(註4)前掲)では「何らかの区画」のための「大溝」との性格付けがなされており、註2)前掲の本報告でもこの理解は否定されきってはいない。
- 27) 山梨県教育委員会ほか 1975 『国分墓地1号墳』など。
- 28) 『類聚三代格』巻三所収、大平十三年二月十四日勅。
- 29) ただし、どれにも打撃痕等は確認されない。
- 30) 註4)前掲概報
- 31) 註23)前掲論文 (p. 351~2) など。
- 32) 群馬県教育委員会ほか 1986 『鳥羽遺跡 G・H・I区』
- 33) 註32)前掲書で、報告者の唐沢至朗・綿貫邦男氏は可能性の一つとして神社説をあげているが、同書の別稿の中で宮本長二郎氏は建築史の立場から考察を加え、鳥居や瑞垣を備えた神殿の復元図を提示しつつ、明確に古代の神社としての性格付けをされている。その後そうした理解にもとづいた、群馬県教育委員会 1992 『歴史を走る－関越自動車道(新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査終了記念写真集－』も刊行されている(特にp. 50~51)。
- 34) 未報告。信藤祐仁氏のご教示による。
- 35) 奈良国立文化財研究所 1989 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』、及び賀淳一郎 1991 「都の焼物の特質とその変容」『新版古代の日本』6(近畿II) 角川書店 p. 263~283
- 36) 奈良国立文化財研究所 1988 『紀寺跡寺域東南部の調査』『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』18 p. 38~41

山梨県甲府市相川河床から発見された

ナウマンゾウ臼歯化石について

間島信男（埼玉県立宮代高等学校）

河西 学（帝京大学山梨文化財研究所）

保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

2 化石産出地点周辺の地質

3 標本の記載

4 考察

1 はじめに

1983年8月の台風直後、甲府市の鈴木昭雄氏によって第1図版の地点でナウマンゾウ化石が発見された。この化石について、筆者らが研究の機会を得たのでここに報告する。

鈴木氏によると、化石発見地点は、甲府盆地北部の相川扇状地を開析して流れる相川河床で、西川との合流点より約100m下流の地点である。ナウマンゾウ臼歯化石は、暗緑灰色シルト質砂層中に挟在される拳大～人頭人の礫層中に側面を上にして露出しており、風化していた（第2図版）。得られた臼歯化石は2点で、上下にレベル差をもって出土し、下方のものは上方のものよりちょうど臼歯1個分ほど斜め下方に位置していた。また、咬板の方向は両者平行していた。発見者の話および座状写真を総合すると、最初に発見されたのは第2標本で、こちらの方が空間的にやや上方に位置していたことになる。化石採取後その端頭は直後の増水で再び削剥され現存しない。

なお、発見以後の経緯について若干触れておきたい。鈴木氏はこの化石を1983年10月に当時山梨県庁の農務部耕地課に在籍していた友人の丸山善仁氏に託した。丸山氏は、教育委員会文化課に持ち込み、当時文化財担当官として在籍していた末木健氏（現山梨県埋蔵文化財センター）に託し調査を依頼した。末木氏は、更新世哺乳動物化石とその産状について考古学の立場から研究されていた稻田孝司氏（現岡山大学教授）が、調査のため1985年に来県された折りに化石を提示して見ていただいたところ、ナウマンゾウの臼歯化石の可能性があるとの指摘を受けた。稻田氏に犬塚則久氏（現東京大学医学部助手）をご紹介いただき、末木氏と保坂は化石を持参して調査を依頼した。犬塚氏は化石を間島に託し、間島はその保存処置や調査・研究を開始した。河西は保坂と共に化石の産出地の地質調査を行い、産出層位の検討作業などを進めた。その成果は、保坂・河西（1986）で報告した。今回の報告は間島の化石標本の記載を中心に、河西の地質調査の結果を再生した全体的・最終的なものである。なお、本化石の年代について名古屋大学の中井信之氏が加速器質量分析による¹⁴C年代測定を行っており、その成果を口頭発表してい

る（中井ほか 1991）。

2 化石産出地点周辺の地質

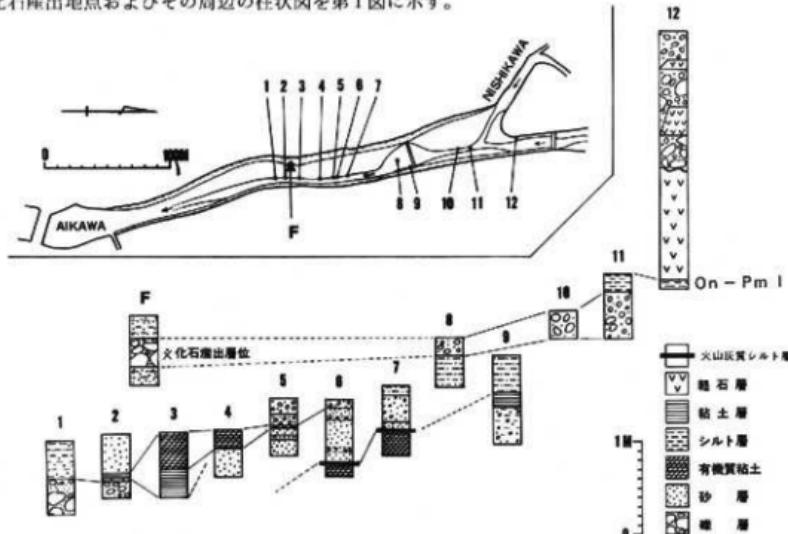
相川扇状地は、甲府盆地北部の山稜地域から甲府盆地内部にむかって南方に広がる扇状地である。化石発見地点付近の相川河床は、扇状地面と4~5mの比高をもつ。これらの山稜域には甲府花崗岩体のうちの昇仙峡花崗岩体、および中新世の太良ヶ峰火山岩、および鮮新世の水ヶ森火山岩などが分布している（三村ほか 1984）。

相川河床に分布する砂層・シルト層・礫層からなり低位段丘礫層におおわれる地層を相川層と新称する。

〔模式地〕 甲府市緑が丘県営総合運動場東方の相川河床

〔層相〕 最下部は、安山岩から主としてなる中礫を含む無層理の緑灰色シルト質砂層である。その上に厚さ約25cmの暗褐色有機質粘土層、および層厚1~3cm、最大7cmの淡桃色シルト層がある。さらに暗緑色の砂層および砂質シルト層を主体とし礫層を挟む層厚2~3mと見積られる地層が続く。礫層は中礫~人礫、最大径30cmで分級は良くない。ナウマンゾウ化石はこの礫層とほぼ同層準から産出した。最上部に層厚約1.2mの一部成層構造のみられる白色軽石質隕下テフラである御岳第1軽石（On - PmI）が重なる。

〔層位関係〕 下位層との関係は不明である。相川層の上位は、2~3mの低位段丘礫層によって不整合におおわれる。低位段丘礫層は、両輝石安山岩礫が多くまれに花崗岩類礫を作り、亜円礫で、分級不良、中礫~人礫、最大径45cm、基質はマサ状の粗粒砂である。また段丘礫層中には上述のOn - PmIの二次堆積薄層が層厚10cm、および30cmの黄白色軽石レンズとして挟在される。化石産出地点およびその周辺の柱状図を第1図に示す。



第1図 化石産出地点周辺の柱状図 Fがナウマンゾウ臼歯化石産出地点

御岳第1軽石 (On - PmI)

層厚約1.2m、下部70cmは分級中～良の塊状の軽石層、中部に2～4cmのゴマシオ状の分級中程度の中粗粒火山砂層を挟み、上位には分級中～不良な軽石が約30cmのり、最上部の15cmでは軽石と火山砂とが1～3cmの薄層で互層する。軽石は最大12mm、新鮮な無色ガラスからなり発泡良好、引き延ばされた軽石で六角板状自形の黒雲母を含む。黒灰～灰色の緻密な火山岩片を含む。主要斑晶鉱物は、斜長石・黒雲母・角閃石・鉄鉱物・ジルコンであり自形結晶を示す。ほかに斜方輝石・單斜輝石・リン灰石・ザクロ石・石英などを伴う。黒雲母をのぞく1/4-1/16mm粒径の鉱物組成は、角閃石54.1%、鉄鉱物33.7%、ジルコン7.5%、斜方輝石1.9%、單斜輝石1.4%、リン灰石1.4%である。屈折率測定値は以下の通りである。

火山ガラスの屈折率 $n = 1.501 \sim 1.506$

角閃石の屈折率 $n_r = 1.678 \sim 1.690$ (主要レンジ 1.682 ~ 1.683)

これらは、御岳第1軽石 (On - PmI) の特性 (新井1972, 新井ほか1977, 町田ほか1984, 北里・新井1986) と一致していることから、本層は On - PmI に同定される。

On - PmI はハケ岳南麓から韭崎台地および茅ヶ岳地域において風成ローム中に最大150cmをこえる厚さを持って分布している (小林ほか 1967)。三村ほか (1984) は、甲府盆地北部の中位段丘堆積物中に層厚150cmあまりの白色軽石からなる山宮降下軽石堆積物を報告しているが、岩相・層位・分布から山宮降下軽石も On - PmI に対比される可能性が強い。

ナウマンゾウの産出層準は On - PmI よりも下位である。On - PmI の年代が、約8万年前 (町田・鈴木1971, 大村ほか1988, 町田・新井1992) とされていることからナウマンゾウの年代はそれ以前と考えられる。同定された広域テフラとの層序関係から、ナウマンゾウ化石を含む相川層は、南関東における下木吉ローム層あるいは下木吉層に対比されると考えられる。

本標本の咬板の一部を試料としたタンデトロン加速器質量分析法による¹⁴C年代測定では、30, 542 ± 2,427 年前という結果が得られている (中井ほか 1991)。この値は上記のテフラによって決定された層位よりは新しい年代値であり、両者は調和的ではない。その理由としては、本標本の風化が進み、保存が悪いことから考えて、汚染による年代の若返りの可能性があるかもしれない。

3 標本の記載

標本を産出地に基づき便宜的にそれぞれ、相川河床第1標本、相川河床第2標本とし、以下にその特徴を述べる。臼歯化石の用語については、長鼻類団体研究グループ (1977) に、計測法については野尻湖発掘調査団・古脊椎動物グループ (1975) に従った。

(1) 相川河床第1標本

Palaeoloxodon naumannii (Makiyama) 右上顎第3大臼歯 (第3図版-1, 2, 3, 4, 第4図版-1, 2) 上顎大臼歯の本来の遠心部のみが残存する不完全な標本である。6枚の咬板が残存しているが、最遠心のものは副咬板である。咬板式は + 5 1/2となる。

咬板の表面は淡黄白色をしており所々茶褐色に帶色している。破断面ではエナメル質は肉眼的に内層と外層に分けられる。内層は白色で厚く、外層は透明感のある黄灰色で薄い。象牙質は白色をしており、個々の咬板の咬合面側で保存されている。充填セメント質、冠周セメント質共に殆ど残存していない。咬板の表面の状態からもともとセメント質は余り発達していなかったと判断される。

化石の破断面には、化石が地表に露出してから発掘が終了するまでの間に形成されたもの（以下、新しい破断面と称する）と、化石が堆積する以前に形成されたもの（以下、古い破断面と称する）が認められる。新しい破断面は、白く、新鮮で、破断面の縁が角ばっている。古い破断面は、しばしば茶褐色を帯び、やや磨滅した感じであり、堆積物に覆われている。新しい破断面は側面（第1標本では舌側面、第2標本では頬側面）と歯根側の破断面がそうである。古い破断面は咬合面側の破断面の中に見られる。

欠損のため本来の咬合面は殆ど残存していない。したがって磨耗の様子についてはよく分からぬが、第5、第6咬板の結節の尖端の状態から、それより近心の咬板もまったくあるいは殆ど磨耗していないと推定される。

近心の咬板が欠損し、本来の遠心部のみが残存しているため、咬合面側から見た全体の輪郭は、遠心に頂点をもつ背の高い二等辺三角形に近似できる。この形から推して、歯冠は長狭であったろう。

各咬板は平板状で、結節はほぼ直線上に頬舌方向に並び、咬板の舌側半あるいは頬側半が他の一方よりも近心または遠心にずれているということはない。

第1咬板 頬側半分の咬板の中ほどの高さのところのみが残存している。咬合面側の破断面は堆積物に覆われており、古い破断面である。近心面の最も咬合面寄りの部分のエナメル質が磨滅して薄くなってしまっており、光沢のある平滑面を形成している。遠心半の正中には菱形歯嚙曲が認められる。遠心半に粗なエナメル褶曲が認められる。

第2咬板 近心半では頬側半分のみが残存し、舌側半は失われている。遠心半では、舌側半分は咬板の中ほどの部分のみが残存しているだけであるが、頬側半分は歯頭付近まで保存されている。咬板の先端部は欠損している。この破断面は堆積物が付着しており古い破断面である。第2咬板の近心面で、第1咬板よりも咬合面側に突出している部分は、第1咬板の近心面に見られるのと同じように、エナメル質が磨滅して薄くなり、光沢のある平滑面を形成している。

咬合面側における咬板の横断面は、側裂溝の延長とおぼしき位置でくびれしている。くびれで仕切られた3つの部分の人大きさはほぼ同じで、中央部はつぶれた菱形、頬側部はつぶれた楕円形をしている。遠心半に粗なエナメル褶曲が認められる。

第3咬板 歯頭部は失われている。遠心半の正中部では、第4咬板の近心半との結合部付近まで保存されている。咬板の先端部は、舌側及び頬側の側裂溝によって、舌側、中央、頬側の3つの部分に分かれるが、側裂溝の底付近より咬合面側は欠損している。これらの破断面は堆積物で覆われており古い破断面である。この破損により3つのエナメル環のような横断面が見られるが、それらの人大きさはほぼ等大で、頬側のものが若干人大きい。いずれもつぶれた楕円形をしている。

第4咬板 歯頸部は欠損している。近心半の正中部は前の咬板との結合部付近まで保存されている。咬板の先端部は、舌側及び頬側の側裂溝によって、舌側、中央、頬側の3つの部分に分かれるが、舌側及び頬側の部分はそれぞれ単一の結節からなり、中央部は細くてより浅い中心裂溝によって先端が2つの結節に分かれている。これらの結節の尖端はいずれも破損していて、破断面には堆積物が付着しており古い破断面である。

中央部の舌側よりの結節が一番大きくなり、他の結節はほぼ等大である。舌側側裂溝は幅が狭いが、頬側側裂溝は幅が広く、特に結節の基部のところで広い。

第5咬板 歯根側は欠損している。咬合面側は各結節の尖端まで保存されている。結節の分岐の仕方は第4咬板とほぼ同じである。側裂溝は深く、幅広い。側裂溝より舌側及び頬側の部分は単独の結節を形成している。中央部は、断面が橢円形をした円柱状に伸び、先端が浅い中心裂溝によって2つの結節に分けられており、このうち舌側のものの方が大きい。側裂溝は咬板の中ほどの高さの所まで伸びている。

第6咬板 前の咬板より大きさが不連続的に小さく、形態も不規則なことから、副咬板とした。歯根部は欠損している。舌側及び頬側の側裂溝によって、舌側、中央、頬側の3つの部分に分かれるが、舌側側裂溝より舌側の部分は完全に失われている。頬側側裂溝は深く非常に幅広く、このため咬板は、基部付近で大きく分岐する。頬側部は基本的に大きなひとつの結節からなるが、肩のところに小さな結節状の瘤がある。中央部はさらに裂溝によって先が3つに分岐している。3つの結節のうち、舌側の2つはまっすぐに咬合面に向かって伸びるが、頬側のものは高さも低く、全体として、遠心に凸湾するカーブを描く。

近心面観では、各咬板の頬側縁は緩く凸湾するカーブを描く。舌側縁はより直線的である。頬側面の歯頸部に見られる歯帶状の部分から急に歯冠幅が狭くなる。

遠心面観では、遠心の咬板ほど幅狭くなるので、前の咬板の頬側及び舌側の縁が見える。第5咬板、第6咬板では、そのすぐ前の咬板の舌側よりにずれて重なる。

舌側面観では、咬板の近遠心方向の厚さは薄い。先端部から歯頸部に向かって近遠心径は徐々に大きくなっている。前後の咬板は、歯頸部にいくに従って接近し、密着するようになる。咬板と咬板の間のセメント質の厚さは、咬板の厚さよりも薄い。ただしセメント質自体は殆ど保存されていない。第1咬板、第2咬板は近心に凸に緩く湾曲する。第3咬板は全体として緩く近心に凸に湾曲するが、側裂溝の底付近から咬合面側は遠心に凸湾する。第4咬板では歯頸部から先端に向かって、近心に凸になるように緩く湾曲する。この湾曲の頂点は咬板の中ほどの高さの所にある。側裂溝の底付近から咬合面側は逆に遠心に凸になるように緩く湾曲し、結節の先端は近心に向かって傾く。全体として緩いS字型のカーブを示す。第5咬板は全体として第4咬板と同じカーブを示すが、湾曲の程度は第4咬板より緩い。第6咬板は舌側側裂溝の底に当たる位置を境として、それより歯根側は近心に凸に緩く湾曲し、それより咬合面側は遠心に凸に湾曲している。この遠心に凸湾しているところは、ちょうど第5咬板で近心に凸に湾曲している所に向かい合っているので、咬板と咬板の間が広く開いている。

頬側面観では咬板と咬板の間のセメント質の厚さは、最大で咬板の厚さと同じくらいか、通

常にそれより薄い。咬板を側面から見た時のカーブの様子は基本的に舌側のそれと同じであるが、舌側よりもはるかに直線的で湾曲の度合いが少ない。

歯根側は、本来の歯根部が欠損しているので、各咬板の不規則な横断面を見ていることになる。エナメル質の細かい褶曲は、エナメル質の外周の部分のみが褶曲している。波高の高い褶曲は数は少ないが、内・外唇共に褶曲しており、褶曲の山になっている部分は、近遠心面の表面の隆起に、谷になっている部分は表面の溝にそれぞれ対応している。以下歯根側から見た各咬板の横断面の形態について述べる。

第1咬板 細かい褶曲のみ残存する。近心半には細かい褶曲、遠心半には波高の高い粗な褶曲が見られる。

第2咬板 横断面の形は中カッコを閉じた形(II)。近遠心共に菱形歯湾曲が認められるが、近心の方がより強い。近遠心共に波高の高い褶曲が見られる。

第3咬板 横断面の形は中カッコを閉じた形。側裂溝から舌側3分の1は、端がやや遠心を向くように曲がる。頬側端はまっすぐ外側に向く。菱形歯湾曲は近心半のみ認められる。近遠心共に波高の高い褶曲が幾つか認められる。

第4咬板 横断面の形は中カッコを閉じた形。頬側端は近心に向かってカーブし、舌側端は遠心に向かって緩くカーブする。近遠心共に菱形歯湾曲が認められるが、遠心のものの方が発達している。近遠心共に波高の高い褶曲が幾つか認められる。

第5咬板 横断面は前の咬板に比べて格段に頬舌方向の幅が狭く、つぶれた菱形をしている。近遠心共に菱形歯湾曲が強く突出する。褶曲はあまり見られない。頬側端はまっすぐ外側に伸びるが、舌側端は遠心に向かってカーブする。

第6咬板 横断面の頬舌方向の幅は更に狭い。第5咬板の遠心面と第6咬板の近心面は歯頭部付近では互いに密着している。舌側の3分の1は欠損しており、残存部分は小さな菱形を2つつなげたヒョウタングリーンのような形をしている。

各咬板の歯冠高と歯冠幅は以下の通りである。

	歯冠高	歯冠幅
第1咬板	59+mm	38+mm
第2咬板	106+mm	73+mm
第3咬板	138+mm	71+mm
第4咬板	153+mm	64mm
第5咬板	141+mm	52mm
第6咬板	93+mm	32+mm

エナメル質の厚さは観察されたレンジは1.9mm~3.25mmであり、平均は2.4mmである。計測値を第1表に示す。

標本番号	種類	咬板式咬板數	使用咬板數	歯冠長	咀嚼面長	歯冠高歯冠幅	咀嚼面幅	厚	咬板頻度	萌出角	咬合面角	咬耗段階
相川河床 第1標本	M3	+ .5 1/2	6	—	90 +	—	153 + 73 + (4) (2)	—	2.4	7※	7※	—
相川河床 第2標本	3M	+ 5 + 5	—	78 +	—	162 + 73 + (3) (2)	—	2.6	8※	8※	—	—

第1表 臼歯の計測値

括弧の数字は近心から何枚目の咬板であるかを表す。

※5cmの長さの間に含まれる咬板の枚数を2倍した値。

(2) 相川河床第2標本

Palaeoloxodon naumanni (Makiyama) 左上顎第3大臼歯（第4図版-3,4、第5図版-1,2,3,4） 上顎大臼歯の本來の遠心部のみが残存する不完全な標本である。5枚の咬板が残存しており、咬板式は+5+となる。鏡像対称となっている点、全体に色調が淡い点を除けば、細部の形態、各組織の色や特徴は第1標本と非常に良く類似している。第2標本の第1～第5咬板は第1標本の第1～第5咬板にそれぞれ対応し、副咬板は欠損しているものと考えられる。全体として舌側半は歯頭部付近まで比較的よく保存されているが、頬側半は、第2、第3咬板を除いて全部欠損している。

歯冠セメント質は余り保存されていないが、それでも第1標本よりはよく保存されている。欠損のため本来の咬合面はほとんど残存していない。咬合面側から見た全体の輪郭は第1標本とはほとんど同じであり、歯冠も良様であったろう。

第1咬板 頬側半は失われている。また咬台面側3分の1ほど部分も欠損している。この咬合面側の破断面のうち、舌側近心半のものは古い破断面である。近心面は、咬合面側の破断面の直下の部分が、幅約1.5cmにわたってエナメル質が磨滅して、光沢のある平滑面となっている。この平滑面は第1標本の第1、第2咬板の近心面に見られたものと同じ性質のものである。咬板中の位置から見て、前位の咬板との接触によってできたものではないと判断される。頬側半が欠損しているが、咬板の横断面の形は、側裂溝を歯根側へ延長した位置でくびれがあるために、舌側、中央、頬側の3つの橢円形が横に連結した形となっている。エナメル褶曲は、第1標本と同じように、細かい褶曲と波高の高い粗な褶曲が認められる。遠心半の正中付近に菱形彫刻と見られる褶曲が存在するが、その突出度は小さい。

第2咬板 咬板の先端は側溝によって、舌側、中央、頬側の3つの部分に分かれるが、このうち、舌側、頬側の部分は、側裂溝の底付近の位置で破損し、失われている。これらの破断面は堆積物が付着しており、古いものである。中央部も同じような位置で折れているが、それより

先端側の破片は遠心半のみが残存している。中央部の結節の先端は第3咬板の中央部の結節と共に一塊の堆積物によって覆われている。側裂溝の底より歯根側の咬板の本体は、歯頸付近まで比較的良好に保存されている。

咬合面側の横断面では、舌側、中央、頬側の3つの部分の大きさはほぼ同じで、舌側のものは水滴形、中央と頬側のものはつぶれた楕円形をしており、中央部の遠心止中には菱形歯嚢曲が突出する。

第3咬板 側裂溝によって、舌側、中央、頬側の3つの部分に分かれている。舌側半は結節の先端まで保存されているが、頬側半は、咬板本体の近心半の一部が保存されているほかは、すべて失われている。中央部の先端は浅い裂溝によって、小さな3つの結節に分かれている。この3つの結節の尖端はいずれも欠損しており、その破断面は前述の堆積物によって覆われている。

第4咬板 基本的には第3咬板と同じ形態をしている。舌側半は歯頸部付近までよく保存されている。頬側半は欠損している。咬板の先端部には歯冠セメント質が保存されており、舌側の結節は尖端がセメント質によって覆われている。中央部の結節もセメント質によって覆われているが、セメント質の欠損によって一部露出している。歯冠セメントはかなり脆弱になっている。この歯冠セメント質は、第4咬板の舌側の結節、中央部の遠心面及び第5咬板の中央部にかけての範囲にかけて保存されている。中央部は浅い裂溝によって先端が3つの結節に分岐している。

第5咬板 舌側側裂溝よりも舌側の部分と中央の先端部分のみが保存されている。舌側の部分は単一の大きな結節で構成されている。中央部は浅い裂溝によって先端が2つの結節に分岐している。

近心面観では第2咬板が最も大きいためこれより遠心の咬板は見ることができない。近心面にはエナメル褶曲に対応する隆起と溝が咬板の伸長方向に平行して幾条も走る。エナメル褶曲に対応する隆起や溝は、歯頸部付近から始まり、ほぼ側裂溝の底を頬舌方向に延長した線までで終わる。第2咬板の近心面正中には菱形歯嚢起があるが、その両脇の溝が深くないので余り高く突出していない。咬板の舌側縁は歯頸部から結節の尖端に向かってほぼ直線的に先細りになっていくが、頬側縁はやや頬側に凸のカーブを描きながら先細りになっていく。咬板の輪郭は細長い舌状である。

遠心面観では、遠心の咬板ほど幅狭くなるので、前位の咬板の舌側端が見えるように前後に連なっている。咬板表面の隆起等の形状は近心面と同様である。

舌側面は保存は比較的良好である。第1咬板は近心に凸の緩やかなカーブを描いている。第2咬板も近心に凸の湾曲を示すが、湾曲の度合は残存している咬板の中でも最も強い。そのため第2咬板と第3咬板の間は広く開いている。第3咬板は近心には凸に緩やかに湾曲し、咬合面側4分の1ほどのところから、結節の尖端が近心を向くように遠心に凸の緩やかなカーブを描く。第4咬板も第3咬板と同じカーブを示し、その曲がりの度合も同じくらいである。第3咬板と第4咬板の間も広く開いている。第5咬板も基本的には第4咬板と同じ形のカーブを示すが、曲がりの度合が少なくより直線的である。咬板と咬板の間隔は、咬板が近心に最も凸湾するところ

で最も広くなる。第1～第4咬板では、咬板の基部付近で、近心から見たとき急に歯冠幅が狭くなる位置のところで、舌側面上に歯帶状の平面が見られる。

頬側面は破損が著しい。咬板と咬板の間隔は舌側面より、かなり狭い。咬板を頬側面から見たときのカーブは基本的に舌側面のそれと同じである。

歯根側面観では、各咬板の歯根は開いていたと推定される。本來の歯根部は破損しているので、各咬板の不規則な横断面を見ていることになる。

第1咬板 舌側半のみ残存。推定される横断面の形態はつぶれた紡錘形である。エナメル褶曲は、波高の高いものが幾つかあり、その間にエナメル外層の凹凸のみからなる細かい褶曲が挟まっている。この特徴は他の咬板でも同じである。

第2咬板 残存部から推定される横断面の形態は、中カッコを閉じた形である。近心半の菱形彫彫曲は明瞭であるが、他のエナメル褶曲に比べて特に突出度が強いというわけではない。遠心半の正中部は細長い板状に欠損している。

第3咬板 残存部から推定される横断面の形態は、中カッコを開じた形である。近心半は正中部が板状に欠損。残存部の遠心半の破断面には明瞭な菱形彫彫曲が見られる。舌側端は、前述の歯帶状の平面の発達によって、丸くなく平らになっている。

第4咬板 残存部から推定される横断面の形態は、長方形である。舌側端は第3咬板と同じく平らになっている。側裂溝の延長状の位置にくびれが見られる。そのくびれで画された中央部の輪郭はおおよそ菱形である。

第5咬板 舌側部の破断面の形態はつぶれた橢円形、中央部の破断面は円に近い橢円形を示す。

各咬板の歯冠高と歯冠幅は以下の通りである。

	歯冠高	歯冠幅
第1咬板	114+mm	62+mm
第2咬板	155+mm	73+mm
第3咬板	162+mm	69+mm
第4咬板	145+mm	43mm
第5咬板	121+mm	36mm

エナメル質の厚さの観察されたレンジは2.0mm～3.45mmであり、平均は2.6mmである。計測値を第1表に示す。

4 考 察

(1) 種の同定について

本報告の標本はいずれも板状歯で高歯冠であり、菱形彫彫曲が見られ、エナメル褶曲が粗なことから、*Palaeoloxodon* 属に同定される。日本の上部更新統からはナウマンゾウ以外の *Palaeoloxodon* 属は産出していないこと、近隣の神奈川県下では多くのナウマンゾウ化石が産出していること、

本標本に見られる形態がこれまでナウマンゾウとされてきた臼歯のそれと比べて本質的な違いが見られないことから、ナウマンゾウ *Palaeoloxodon naumanni* (Makiyama) に同定してさしつかえないと考える。

高橋 (1991) はこれまでに報告されている主なナウマンゾウの臼歯の変異についてまとめており、それと本標本との比較を試みる。歯冠長、歯冠高については破損のため比較が難しい。歯冠幅については上顎第3大臼歯としては狭いが、これは本標本が臼歯本来の遠心部が保存されているためである。エナメル質の厚さは、高橋 (1991) が標準的な厚さとした範囲内に収まっている。咬板頻度は高いが、これは破損のため5cm中に含まれる咬板の数を2倍にしている影響が出ているものと考えられる。

(2) 発見の意義

ナウマンゾウは日本で最も多産する化石長鼻類であり、その産地は全国約180カ所が数えられている。(亀井編 1991)。しかしながら、山梨県下では、これまで山梨市南の兄川河床産しか報告例がなく(直良 1968)、本例が2例目である。本標本は産出層準も明確であり、資料価値が高い。

地理的には、東京、千葉、神奈川を中心とする関東地域、模式標本の産地でもある静岡県浜松市佐浜および長野県野尻湖などの多産産地との空白域を埋める発見として注目される。

ナウマンゾウの産出層準は、多くの場合、部層単位で知られているに過ぎず、広域テフラとの層位関係が明らかとなっている例は少ない。その中で、麻地が比較的近く、かつ御岳第1軽石が関係してくる層位のものとしては、神奈川県平塚市上吉沢産(長谷川・松島 1985)、および千葉県市原市引田産(間島ほか 1990)がある。前者の産出層準は御岳第1軽石より上位で小原台軽石(OP)より下位(約8万年前)であり(長谷川・松島 1985)、また後者はほぼ御岳第1軽石の層準である。本標本は御岳第1軽石より下位なので、それらよりは古い年代のものとなる。いずれにせよ最終間氷期の高海水面期から最終氷期の最盛期までの年代の資料の蓄積は、ナウマンゾウの時代的変遷を知るうえで欠くことのできないものである。

(3) 相川河床標本のタフォノミーについて

第1標本と第2標本は、左右の同じ種で、保存状態がよく似ていること、対応する各部分の大きさがほぼ等しいこと、及び咬板の細部の形態(エナメル褶曲の発達程度、咬板の湾曲の度合い、結節の数と大きさおよび配列の仕方など)がよく一致することから、同一個体のものである可能性が極めて高い。また、残存している結節に磨耗の跡が見られない、もともと歯冠セメント質の発達が良くなく、歯根が開いていたと判断されることから、萌出前かそれに近い状態の臼歯だったと考えられる。すなわち、臼歯としては、各咬板が分離しやすい状態にあったわけである。

一方で、本標本には咬合面に堆積以前に生じた破損が見られ、産状から見ても明らかに異地性の化石である。

これらを総合すると、堆積物中の礫として運搬され、かつ咬板が破損するなどの過程を被りながら、各咬板が完全に分離することなく、しかも同一個体の2つの臼歯が隣接する状態で埋没したことになる。また、近心面にみられるエナメル質の磨滅による平滑面はいわゆる隣接面のような生体時に形成されたのではなく、臼歯の化石化過程（広義）のいずれかの時期に形成されたものである。以上の特徴を加味して、本標本に働いたタフオノミックな過程を説明することは現状ではできないが、非常に興味深い産状として、今後、他産地との比較検討を数多く行うことによって明らかにしていきたいと考えている。

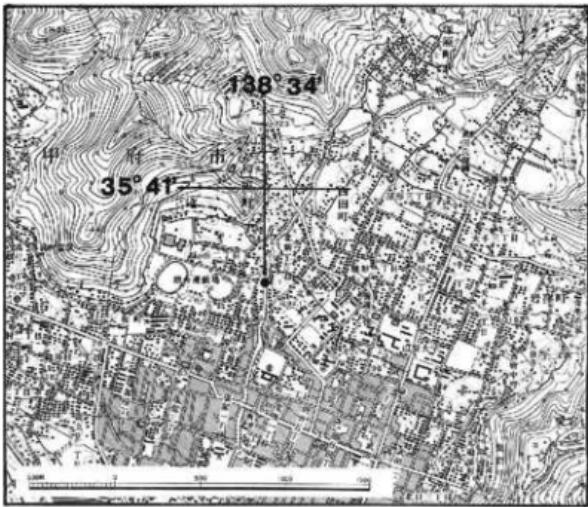
謝 辞

化石を発見され、化石の調査を託された甲府市在住の鈴木昭雄氏、筆者らに研究の機会をあたえてくださった山梨県教育委員会（当時文化課）の末木健、東京大学医学部の犬塚則久氏に感謝の意を表する。

文 献

- 新井房夫（1972）「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノジーの基礎的研究—」『第四紀研究 11』 p254-269
- 新井房夫・町田洋・杉原重夫（1977）「南関東における後期更新世の示標テフラ層—特性記載とそれに関連する諸問題—」『第四紀研究 16』 p19-40
- 長鼻類固体研究グループ（1977）「長鼻類の頭蓋と歯についての用語」『化石研究公会誌特別号』 p15
- 長谷川善和・松島義章（1985）「関東地方を中心とする長鼻類化石に関する若干の考察」『化石研究公会誌特別号 2』 p87-88
- 保坂康夫・河西学（1986）「甲府市内における先土器時代研究の可能性について」『甲府市研究 3』 p99-108
- 施井節夫編（1991）「日本産長鼻類化石リスト」『日本の長鼻類化石』 p228-241
- 北里洋・新井房夫（1986）「有度丘陵、小鹿層に分布する On-Pm1 テフラ」『静岡大学地球科学研究報告 12』 p245-249
- 小林国大・清水英樹・北沢和男・小林武彦（1967）「御岳第一浮石層—御岳火山第一浮石層の研究 その 1—」『地質学雑誌 73』 p291-308
- 町田洋・鈴木正夫（1971）「火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年—フィッショントラック法による試み—」『科学 41』 p263-270

- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) 「テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』 p865 - 928
- 町田洋・新井房夫 (1992) 『火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』 p276
- 間島信男・三島弘幸・野中義彦 (1990) 『千葉県市原市の上部更新統姫崎層より産出したナウマンゾウ切歯化石』『地球科学 44』 p31-35
- 三村弘二・加藤祐二・片山正人 (1984) 「御岳界仙峠地域の地質」『地域地質研究報告 (5万分の1 図幅)』 p61
- 中井信之・有田陽子・森育子・中村俊夫・亀井節夫・秋山雅彦・沢田健 (1991) 「哺乳類化石のAMS ^{14}C 年代測定」『日本文化財科学会研究発表会要旨』 p1-2
- 中井信之・有田陽子・中村俊夫・亀井節夫・秋山雅彦・沢田健 (1991) 「ナウマンゾウ、オオツノジカのAMS ^{14}C 年代と $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比による最終氷期の気候変動」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 (II)』 p26-39
- 直良信夫 (1968) 『狩獵』
- 野尻湖発掘調査団・古脊椎動物グループ (1975) 「ナウマンゾウの化石」『野尻湖の発掘 1962-1973』 p124-153
- 大村明雄・河合貞行・玉生志郎 (1988) 「 $^{238}\text{U}-^{230}\text{Th}$ 放射非平衡系による火山噴出物の年代測定」『地調月報 39』 p559-572
- 高橋将一 (1991) 「ナウマンゾウの変異」『日本の長骨類化石』 p147-153



第1図版 化石産出地点（図中の●印）

この地図は国土地理院発行の2.5万分の1地形図【甲府北部】の一部を使用した。



第2図版 相川河床第2標本（左上顎第3大臼歯）の産状

頬側面を上にした状態で埋没している。白く見えるのは咬板の破断面。画面手前側が歯根側、右手側が近心側である。



1



2



3



4



第3図版

Palaeoloxodon naumannii (Makiyama)

第1図～第4図 右上顎第3大臼歯、相川河床第1標本

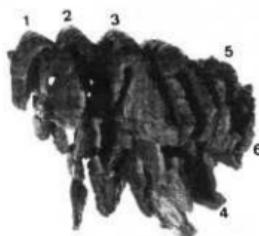
1. 近心面観

2. 舌側面観

3. 遠心面観

4. 頬側面観

スケールは 10cm



第4図版

Palaeoxodon naumannii (Makiyama)

第1図～第2図 右上顎第3大臼歯、相川河床第1標本

1. 咬合面観

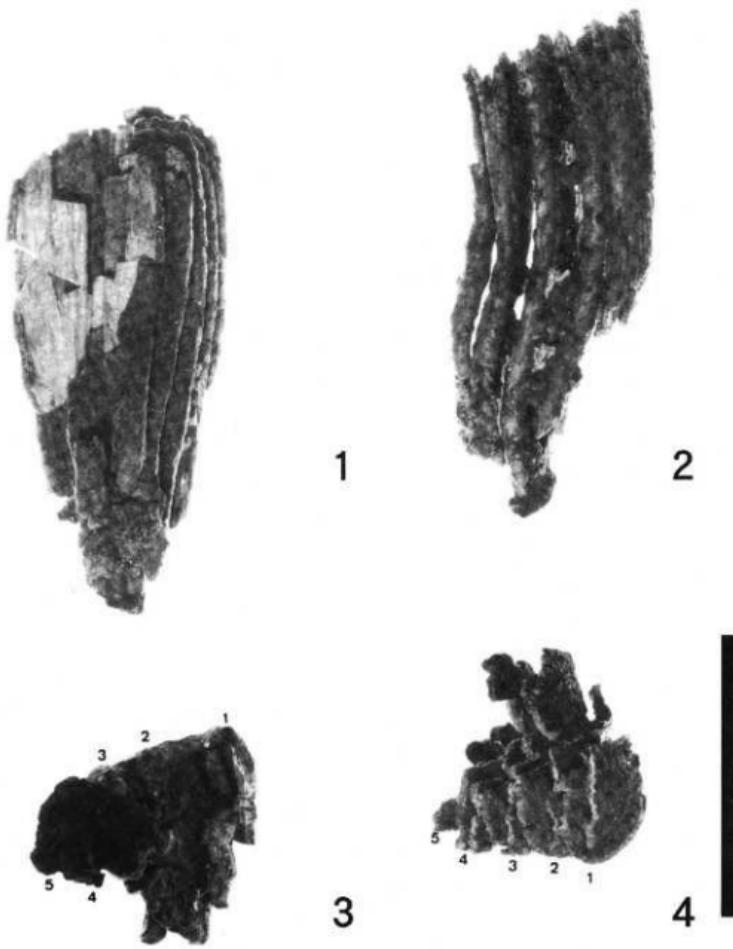
2. 舌根側面観

第3図～第4図 左上顎第3大臼歯、相川河床第2標本

3. 近心面観

スケールは 10cm

4. 腸側面観



第5図版

Palaeoloxodon naumanni (Makiyama)

第1図～第4図 左上顎第3大臼歯、相川河床第2標本

1. 遠心面観
2. 舌側面観
3. 咬合面観
4. 歯根側面観

スケールは 10cm

明野村中村道祖神遺跡出土炭化物について

松谷曉子（東京大学総合研究資料館）

長沢宏昌（山梨県教育庁学術文化課）

1

ここに紹介する資料は、明野村中村道祖神遺跡から出土した炭化種子塊の一部である。これまで、県内ではこのような炭化種子塊が何例か出土している。しかし、それらの資料の同定が行われ、それが公表された例となると非常に少ないので現状である。その理由は、炭化種子塊そのものの存在がかなり偶然の結果としての産物であること、また、それが発見される場合も、よほど細密周到な発掘をしている心算でもやはり偶然性に左右される性格のものであることなど、第一義的には発見例そのものが非常に少ないと挙げられる。それと同時に、発見される種子塊が小さいものである場合がおおく、分析にまわす充分な量がないという担当者の判断により同定に出さないケースもある。

今回報告する資料は幸いにも量的に充分あり、担当者の理解により電子顕微鏡での分析を行うことができた資料である。県内における数少ない分析資料であり、また、中世の有用植物の一資料として、ここに報告するものである。

2

中村道祖神遺跡は県営園場整備事業に伴う事前調査として、平成元年度に発掘調査された。純文時代～平安時代の遺構・遺物も確認されているが、主体を成すのは中世の地下式坑で45基が確認された。地下式坑からは出土遺物が少ないが、わずかに出土した土師質土器や内耳土器などから15世紀～17世紀に位置付けられている。

今回紹介する炭化種子塊は、この内の46号土坑（地下式坑）から出土したもので、内部から出土した土師質土器によって15世紀に位置付けられる。さて、炭化種子塊は室内の壁面に極めて近い部分から床よりやや浮いた状態で出土しており、数cm程度の大きさでいくつかに割れていた。今回の資料はそのうちの小破片を用いたものである。

サンプルとした炭化種子の量は、径1cmの管瓶内で高さも1cmあり、したがって量は1cc位ある。実体顕微鏡下で数えてみると、ざっと100粒くらいあった。炭化により数粒が接着して塊となっているものもあるが、一粒ずつも多い。粒の人きさは長さが1.5～1.2mm位、幅が1.2mm位である。

実体顕微鏡下で胚の跡が観察され、イネ科の穎果と推察できる。大部分の粒で穎（イネで粉穀に相当する部分）が観察されるが、実体顕微鏡や走査電子顕微鏡の倍率で観察したとき、この部分（穎）は横方向に波打って見える（写真1）。この部分を拡大すると、穎の表皮細胞を構成している長細胞の一端に乳頭突起が存在するのが認められる（写真1a）。この特徴はアワ及び

11近縁のエノコログサの仲間に認められる特徴であり、粒の大きさと外形及び時代を考慮する
とアワと考えてよいであろう。

別の粒（写真2）を拡大して観察される長細胞では乳頭突起が明瞭ではない（写真2a）。隣接
の長細胞と入り組んでいる波打った側枝はキビやヒエにも見られるが、ヒエの側枝よりは短く、
また側枝を除去した反細胞の中央部が幅広いので、同じくアワと判断できる。以上の結果、46号
土坑の主室壁面から出土した種子は、穎が付着した、つまり脱穀していない状態のアワと考え
られる。

3

近年、山間部の遺跡の調査でも土器・石器といった人工遺物だけでなく、炭化材や骨片などの
自然遺物に注意がはらわれるようになってきている。本県においても発掘現場での慎重な調
査や、整理段階での水洗選別あるいは低湿地遺跡・谷部の調査などにより、ここ数年で飛躍的
に資料が増加してきている。

自然遺物のうち、とくに縄文時代の有用植物についての研究や資料収集が進み、その中でも
食用に供された植物の例が増加してきている。自然遺物は火熱を受けるか、水中など酸素の逃
離された状態でなければ残らないものであり、本県の場合は台地上の遺跡の発掘例が多いこと
もあって炭化物として確認される。なお、最近では低湿地遺跡の調査が多く行われるようにな
ったこともあって、未炭化の状態のものも出土例が増えている。

これらの食用植物のなかで、圧倒的に多いのがドングリ・クルミ・クリ・トチの4種類の堅果
類である。これらは堅い殻の存在とその大きさから、残存状況が良好かつ発見しやすいために
確認数が多くなっているのであるが、一方で、道端覆土や土器内の土の水洗選別により、台地
上の遺跡ではあっても1~2mmの微小種子類も検出されることが明らかとなっている。エゴマ・
シソ・アブラナ類などの栽培種とされるものや、利用植物のオヤマボクチ・サルナシ・ニワトコ、
さらには畠雜草であるエノキグサ・スペリヒュ・タデなど、これまで水洗選別を実施した
花鳥山・上の平の2遺跡だけでも13種類が確認されている。また、これまでほとんど報告例のな
かった球根類も花鳥山・上の平・糸廻堂・水呑塙北・獅子之前の5遺跡で確認されており、特に
花鳥山では30点以上出土し、また、土器内のオコゲとしても確認されていることから、その利用
が確実であることを示している。

このように、発掘段階での注意によって、微小遺物の検出は充分行うことができるるのである
が、これまで述べてきた縄文時代の諸遺跡の例に比べ、食糧の柱がはっきりしている弥生時代
以降については、これまでそのような努力がなされていないこともあって、本県においてはか
えって資料が貧弱であると言わざるをえない。もともと弥生時代の遺跡調査例が少なかったこ
とも事実であるが、それを除けば、古墳時代以降の集落の発掘調査例は数えきれないほど行わ
れてきているのであり、「米」の存在を当然のことと思うあまり、それ以外の部分を追求しよう
とする姿勢が欠けていたことは否めないであろう。平成元年に発掘調査された八代町身洗遺
跡は、本県で初めて水田跡が確認された低湿地遺跡であり、木製品や大小の種子類が確認され

ている。このうち、栽培植物としてはモモ・ヒョウタン仲間・イネ・オオムギ・アブラナ類・シソがある。ほとんどの資料は弥生時代に位置付けられるが、オオムギは古墳時代以降である。身洗沢遺跡では層位毎のサンプリングを徹底して行ったのであるが、少なくともここではアワは確認されていない。

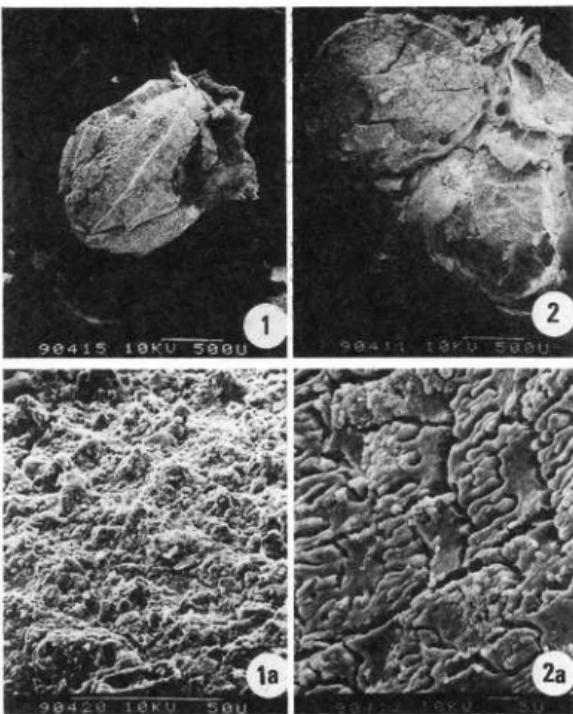
4

今回は中世に位置付けられるアワが確認されたわけであるが、本県内でアワと同定された資料としては初めてのものである。前述したように、本県内では弥生時代以降の（栽培も含めた）利用植物の研究は意外なほど進展していない。当然のことながら、米や粟といった穀類以外にも多くの種類が存在したはずである。弥生時代以降は米が食物の柱となるとはいっても、たとえば奈良・平安時代は『貧窮問答歌』に見られるごとく、庶民階級では米などもってのほかであり、それ以外の食糧の確保も非常に困難な様相である。また、中世以降についても、つい最近までは米を口にすることはハレの口に限られていたわけであり、通常の食糧は米以外で賄われているわけである。このような状況からすれば、庶民の生活復元には、まさに米以外の食糧の追求が重要な意味をもつことになる。そのためにも、今後も遺跡での積極的なサンプリングや水洗選別法などによって資料を増加させていくことが重要であり、その積み重ねを行うことによって山梨県内におけるアワの利用の時期、あるいは、別の種類の栽培あるいは利用植物が確認され、庶民レベルでの生活の一端に触れることが可能となろう。

(追補)

この資料については、二年以上前のことになるが当時北巨摩郡明野村教育委員会の大森隆氏（現松戸市教育委員会）よりアワらしき炭化物が出土したことを知られ、その一部を長沢が預かり、松谷のもとに持参した経緯がある。もちろん中村遺址神遺跡の報告書に記載すべき資料であり、そのための同定資料として松谷のもとに持参したものであるが、報告書の原稿執筆締切を確認しなかった長沢の怠慢により、この資料については本報告のまま報告書が刊行されてしまった訳である。県内で初めてのアワと確認された資料であるにもかかわらず、仲介者の怠慢でこの貴重な資料を埋もれさせたままにすることは許されるべきでなく、せめて資料報告をすべきであるとの考え方から、今回の報告となったものである。報告書に記載できなかった責任はすべて長沢にあり、大森氏には深謝するものである。

中村道祖神遺跡 46 号土坑主室壁面出土炭化種子



1992年3月31日 発行

研究紀要 8

編集・発行 山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

印刷 慶林堂印刷所

BULLETIN
OF
YAMANASHI PREFECTURAL
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY
&
ARCHAEOLOGICAL CENTER
OF YAMANASHI PREFECTURE

Number 8

CONTENTS

Potteries from Kinsei Site. (Late Jomon Period)

—by Takeshi NIITSHI

On Sue pottery "Chokeihei"; Tall-necked zase Excavated
from Ryonoki-Jinnja, Yamanashi.

—by Hirofumi IDEZUKI

On the fossil molar teeth of Palaeoloxodon naumanni from the
Ai-kawa River, Kofu City, Yamanashi Prefecture, Central Japan.

—by Nobuo MAJIMA
Manabu KASAI
Yasuo HOSAKA

Charred graines obtained from Nakamura-DosoJin site.

—by Akiko MATSUTANI
Hiromasa NAGASAWA

YAMANASHI PREFECTURAL MUSEUM OF ARCHAEOLOGY &
ARCHAEOLOGICAL CENTER OF YAMANASHI PREFECTURE.

March 1992